

松井田町埋蔵文化財調査会報告書 <10>

群馬県碓氷郡松井田町

坂 本 北 裏 遺 蹤

碓氷峠くつろぎの郷公園整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

松井田町埋蔵文化財調査会

群馬県碓氷郡松井田町

坂本北裏遺跡



環状配石遺構 1

松井田町埋蔵文化財調査会

「坂本北裏遺跡」 正誤表

頁	行	誤	正
1	37	絡み条体	絡条体
5	3	1 軒	6 軒
6	24	綾 杉 紋	綾 杉 文
35	20	換形打製	撥形打製
35	21	換形打製	撥形打製
35	22	換形打製	撥形打製
35	24	換形打製	撥形打製
35	25	換形打製	撥形打製
35	29	換形打製	撥形打製
35	30	換形打製	撥形打製
35	34	換形打製	撥形打製
44	36	換形打製	撥形打製

写真図版	遺物番号	位置訂正
5	6	上下逆
5	42・43	上下逆
6	97	上下逆
7	174	上下逆
8	222	上下逆
10	377	上下表裏逆

序

松井田町は、碓氷峠を源とする清らかな碓氷川の流れや、四季折々の美しさを見せる妙義懐に代表される恵まれた自然環境、また古くよりふるさとの人々によって守られてきた伝統ある文化を糧に歩んできた“峠のまち”であります。

石器時代といわれる太古には、信州和田峠産の黒曜石が群馬県内はもとより関東一円の遺跡から見つかっていますが、これは石器の原石となる黒曜石がこの地を経て流通していた証であり、同じようなことが他の遺物の分析からもわかっています。

古代に整備された官道である東山道、近世の中山道、そして明治に至ってはアプロト式機関車による碓氷峠越えがなされ、その後の車社会の到来により碓氷バイパスや上信越自動車道が建設されました。また、平成9年には長野新幹線が開通し、同時に伝統ある碓氷峠の鉄路「碓氷線」が廃止になったことは、歴史の光と影を見る思いであります。

このように、松井田町は交通の歴史とともに変革、発展してきたことが“峠のまち”といわれる所以であり、この峠の麓ゆえ坂本は栄えてきたともいえましょう。

ここに報告いたします「坂本北裏遺跡」は、歴史と自然環境を活かした町の事業である「くつろぎの郷」整備に先立つ発掘調査により発見されました。出土した縄文時代の遺構や遺物は、先に述べた流通の痕跡を色濃く残すものも多く、まさに“峠のまち”的歴史の初源ともいえます。これらは今まで発見された多くの資料とともに、町の歴史解明における基礎資料として研究、活用されるべきものであります。今までの道のりを見据え、今そして明日からの足場を固めることこそが、目まぐるしい時代に生きる私達には必要であろうと考えます。町の基本理念にもあります「豊かな町づくり」も、心の豊かさがその第一歩であるとすれば、祖先から引き継がれてきた文化の証を自分のものとして考え、次代に伝えてゆくことが、豊かな町を作りゆく礎となることでしょう。

本書がこれらの資料として、広く活用していただければ、誠に有り難く存じます。

最後になりましたが、発掘調査に従事された方々をはじめ、現地調査から本書刊行に至るまで多くのご理解、ご協力をいただきました関係各位に深く感謝を申し上げて、冒頭のことばといたします。

平成11年3月

松井田町埋蔵文化財調査会
会長 内田武夫

例 言

1. 本書は「碓氷峠くつろぎの郷公園」整備事業に伴う平成9年度『坂本北裏遺跡』埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 松井田町埋蔵文化財調査会組織表

役職	平成9年度	平成10年度	役場役職	役職	平成9年度	平成10年度	役場役職
会長	内田 武夫	内田 武夫	町長	理事	上原 富次	上原 富次	文化財調査委員
副会長	土屋 真	土屋 真	助役	〃	佐藤 義一	佐藤 義一	〃
〃	福塚 勇	福塚 勇	教育長	監事	寺島 正行	上原 取	取入役
理事	中里 義昌	田中 久	總務課長	〃	塙谷 芳夫	塙谷 芳夫	財政課長
〃	白石 敏行	白石 敏行	企画課長	事務局長	萩原 豊彦	萩原 豊彦	文化財係長
〃	武井 貞夫	上原 正男	建設課長	事務員	田口 修	田口 修	文化財主任
〃	内田 守	内田 守	社会教育課長				

3. 調査は松井田町教育委員会内に事務局をおく松井田町埋蔵文化財調査会（会長 内田武夫）の委託を受け、スナガ環境調査株式会社（前橋市青柳町211-1 代表取締役 須永真弘）が実施した。

4. 調査主 体 松井田町埋蔵文化財調査会（会長 内田武夫）

調査担当 金子正人（スナガ環境調査株式会社）

5. 遺跡名 坂本北裏遺跡

6. 所在地 松井田町大字坂本字北裏1255番地外

7. 調査期間 発掘調査 平成9年11月10日から平成10年2月11日迄

整理調査 平成10年9月10日から平成11年3月31日迄

8. 調査面積 4,100m²

9. 調査経費は開発主体である群馬内部土地開発公社がその全てを負担した。

10. 本遺跡の出土遺物・写真・図面等の資料は松井田町教育委員会が一括して保管する。

11. 発掘調査は松井田町教育委員会の指導のもとにスナガ環境調査株式会社が当たり、調査の指導を金子正人、測量を板垣宏・神津芳夫、岡田あゆ美・権田友友・荻野博巳・新保一美・勝田貞幸、安全管理・涉外事務・遺構写真撮影を神津芳夫、重機の運転管理を郡丸保男、作業事務を須永豊・柴崎信江が担当した。

12. 本書は松井田町教育委員会の指導のもとにスナガ環境調査株式会社が作製に当たり、執筆・校正・編集を須永真弘・金子正人・神津芳夫、遺物の注記・実測・計測を神津芳夫・柴崎信江・岡田あゆ美・佐々木智恵子、測量図の整理・校正と遺構遺物のトレース・版下作成を戸田あゆ美・神津芳夫、文書清書を須永豊・内業事務を須永豊・柴崎信江が担当した。

13. 発掘調査では次の各方面にご指導ご協力を戴きました。記して感謝の意を表す次第であります。

群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 高崎市教育委員会

安中市教育委員会 松井田町企画課 松井田町教育委員会

菊池実 山口逸弘 横沢健二 関俊明（以上群馬県埋蔵文化財調査事業団）

神戸豊雄（高崎市教育委員会）

凡 例

1. 古器実測図の表現方法は以下の通りである。

…自然面 …敲打痕 …炭化物付着痕

…打製石斧等の磨耗痕（使用痕）

2. 掃図内の太数字は遺物番号である。

目 次

序
例言
凡例
目次

I. 調査に至る経緯	1	4 集石	23
II. 遺跡の位置と歴史的環境		5 石臼炉	26
1 遺跡の位置	1	6 土坑	27
2 歴史的環境	1	VI. その他の遺物	
III. 基本土層	5	1 繩文土器	27
IV. 発掘調査の方法	6	2 石材の分布状況	29
V. 遺構と遺物		3 石器	34
1 積穴住居跡	6	4 検出遺物	43
2 柄鏡形敷石住居跡	7	VII. まとめ	
3 環状配石遺構	11	抄録	46

挿図目次

第1図 周辺遺跡位置図	2	第20図 環状配石遺構 4 出土遺物 2	22
第2図 遺跡位置図と公共座標概略図	3	第21図 1号集石実測図	23
第3図 遺構グリッド配置平面図と 試掘：レンチ・溝跡区	4	第22図 1号集石出土遺物	24
第4図 基本土層断面図	5	第23図 2号集石実測図	25
第5図 噴穴住居跡実測図	6	第24図 2号集石付近出土遺物	26
第6図 柄鏡形敷石住居跡実測図	7	第25図 3号集石実測図	26
第7図 積穴住居跡の出土遺物	8	第26図 1・2号石臼炉実測図	27
第8図 柄鏡形敷石住居跡の出土遺物 1	8	第27図 上坑出土遺物	28
第9図 柄鏡形敷石住居跡の出土遺物 2	9	第28図 繩文土器 1 (E～Jグリッド)	30
第10図 柄鏡形敷石住居跡の出土遺物 3	10	第29図 繩文土器 2 (J～Lグリッド)	31
第11図 環状配石遺構 1 出土遺物	12	第30図 繩文土器 3 (L～Rグリッド)	32
第12図 環状配石遺構 1 実測図	13	第31図 繩文土器 4 (R～Xグリッド)	33
第13図 環状配石遺構 2 実測図	15	第32図 石鎚・スクレイパー・石皿	36
第14図 環状配石遺構 2 山土遺物 1	16	第33図 丸石・石棒	37
第15図 環状配石遺構 2 出土遺物 2	17	第34図 石棒	38
第16図 環状配石遺構 3・土坑実測図	18	第35図 四石・多孔石・敲石・磨石 1	39
第17図 環状配石遺構 3 出土遺物	19	第36図 四石・多孔石・敲石・磨石 2	40
第18図 環状配石遺構 4 実測図	20	第37図 四石・磨石・磨製石斧・打製石斧	41
第19図 環状配石遺構 4 出土遺物 1	21	第38図 打製石斧・磨石	42
		第39図 県内の主な配石遺構位置図	45

写真図版目次

図版 1～10	49
---------	----

表 目 次

第1表 遺構別黒竜石・石材の分布状況表	29	第3表 遺物集計表	47
第2表 県内の主な配石遺構一覧表	45		

I. 調査に至る経緯

今回発掘調査の実施された松井田町坂本地区は、長野県境に位置する本町西部の碓氷峠の麓にある。松井田町の交通の歴史（越え）の中心地であり、中山道の宿場町として今も残る家並みや豊かな自然を求めて訪れるハイカーも多い。長野新幹線開通に伴い廃止となる碓氷峠の鉄道は、急峻な峠越えの路線として全国的に有名であり、諏訪の駅である「横川」地域の廃止後の在り方が懸念されていた。このような状況の中で松井田町を特徴付ける「峠」エリアの地域振興策の一つとして、くつろぎの郷（自然公園）建設計画が策定された。この事業着手にあたり、松井田町長（企画課）より松井田町教育委員会（以下教委とする）に該地の埋蔵文化財確認のための試掘調査依頼（平成9年4月15日付）が提出された。これを受け同年6月2日から27日に教委で試掘調査を実施したところ、部分的に縄文時代の遺構・遺物が検出された。この保護について、開発主体である群馬西部土地開発公社（役場企画課に松井田事務所をおく。以下公社とする）と保護サイドの教委で協議を重ね、①遺跡範囲は発掘調査で記録保存を図る、②調査は教委に事務局をおく松井田町埋蔵文化財調査会（以下調査会とする）で実施することの2点で合意した。この後、公社と調査会で平成9年11月7日付埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結。また両者で調査実務の民間機関への委託を申し合わせた上で、調査会とスナガ環境測定株式会社とで同上委託契約を締結し、平成9年11月10日をもって発掘調査が開始された。

II. 遺跡の位置と歴史的環境

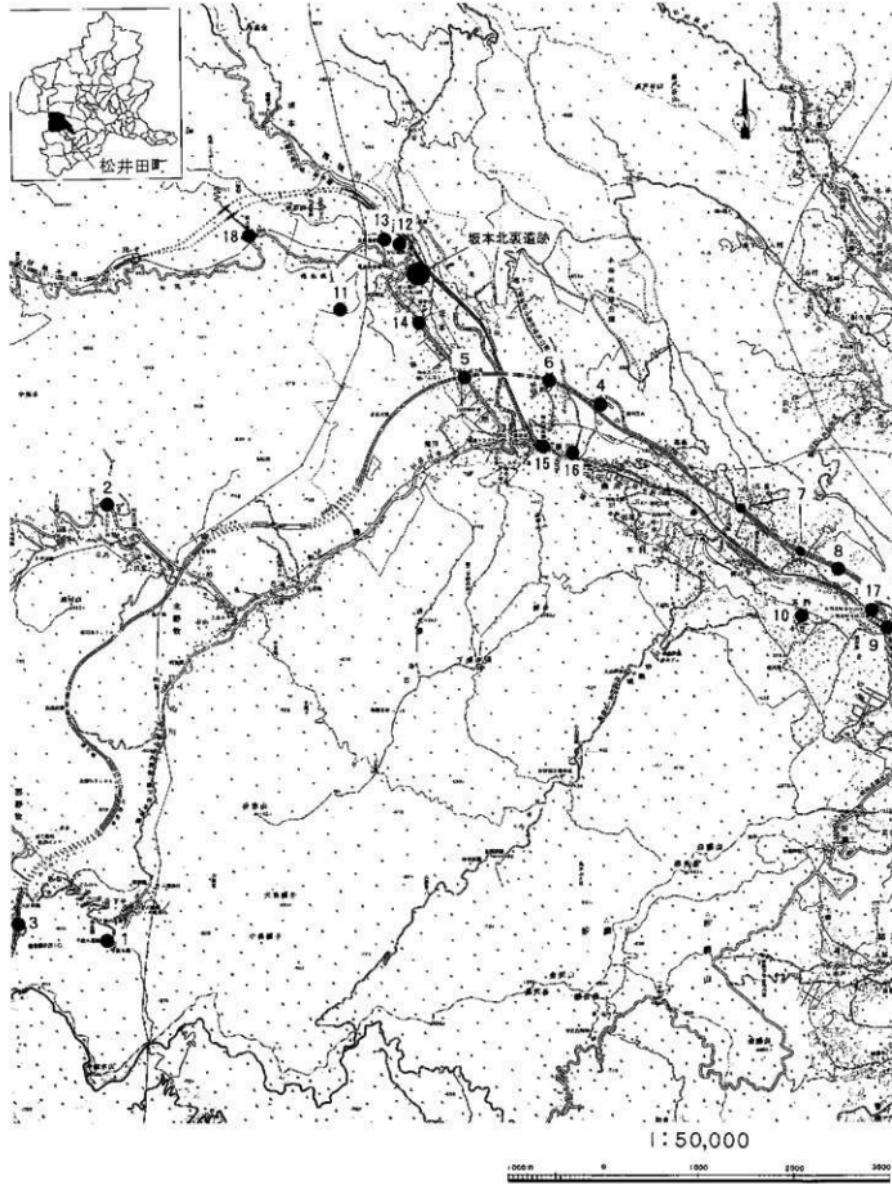
1 遺跡の位置

本遺跡は松井田町役場から北西方向約7.7kmにある。JR信越本線横川駅の北西約2.4kmの地点で碓氷郡松井田町人字坂本字北裏1225番地外に所在する。遺跡の北西方向にある金山（1602m）笛大山（1590m）劍の峯（1430m）十六曲峰（1288m）等の山腹を源流とする露積川が遺跡の北側を南東方向へ流れ、南側は群馬・長野県境の峠町にある湧水を源流とする碓氷川が南東方向へ流れている。遺跡はこの露積川と碓氷川に挟まれた、幅約1km程の舌状台地の北辺に位置する。また背後は愛宕山（530m）勿石山（710m）子持山（1107m）一ノ字山（1336m）の山稜が長野県境まで続いている。これらの山麓から平地への変換点近くで、標高480m前後の南東斜面上に位置する。視界は東から南東方向に町の平坦部の一角を望めるが、南東や西側はすべて山稜が視界を遮る。特に南に望む妙義山系の丁須の頭（1057m）付近は峻険で奇岩が屹立している。

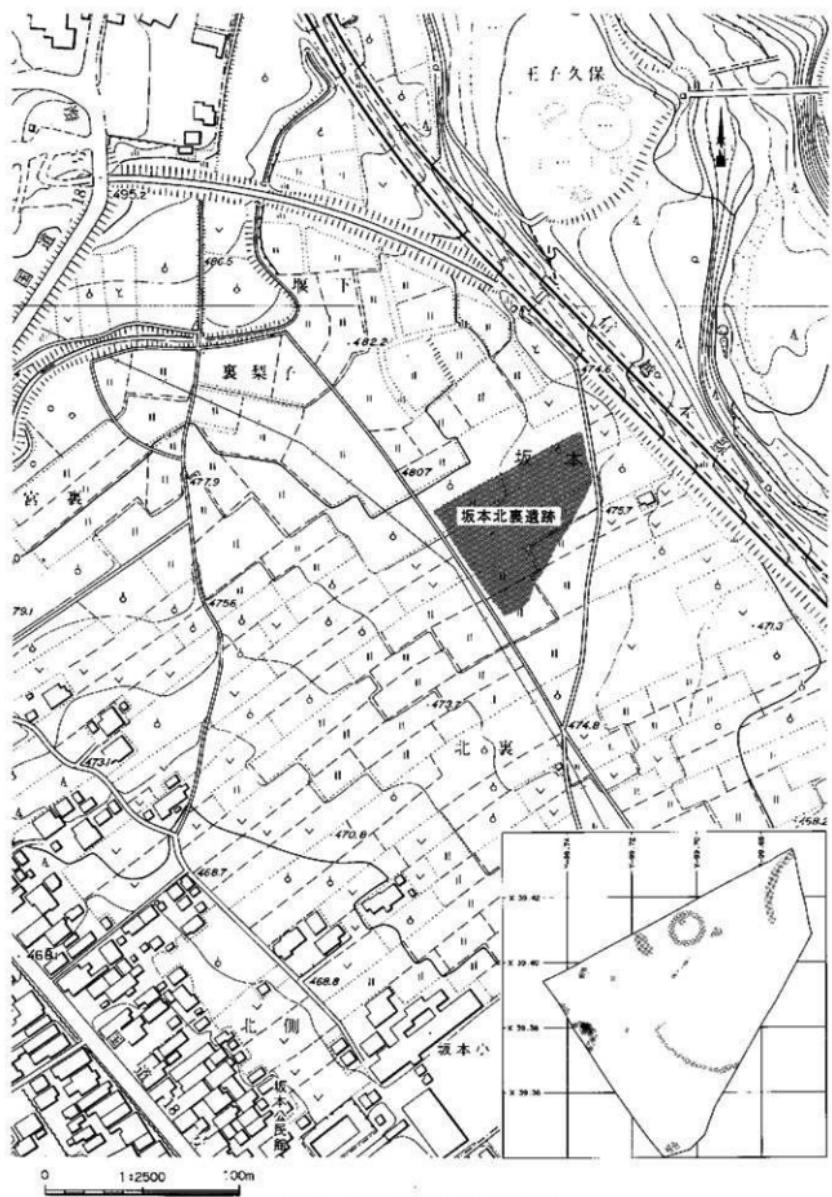
2 歴史的環境

本遺跡の所在する坂本地区は近世には中山道の宿場として、また近代からは鉄道の町として発展した所である。昭和46年には交通安全、高適化対策として国道18号線の碓氷バイパス建設、平成5年に至り上信越自動車道が建設された。これらの工事に伴う発掘調査により縄文時代から奈良・平安時代の遺跡が発見されている。発掘された遺跡は原始・古代の人々の生活や文化を考える上で重要なものとなっている。本遺跡周辺には下記のような主要遺跡がある。

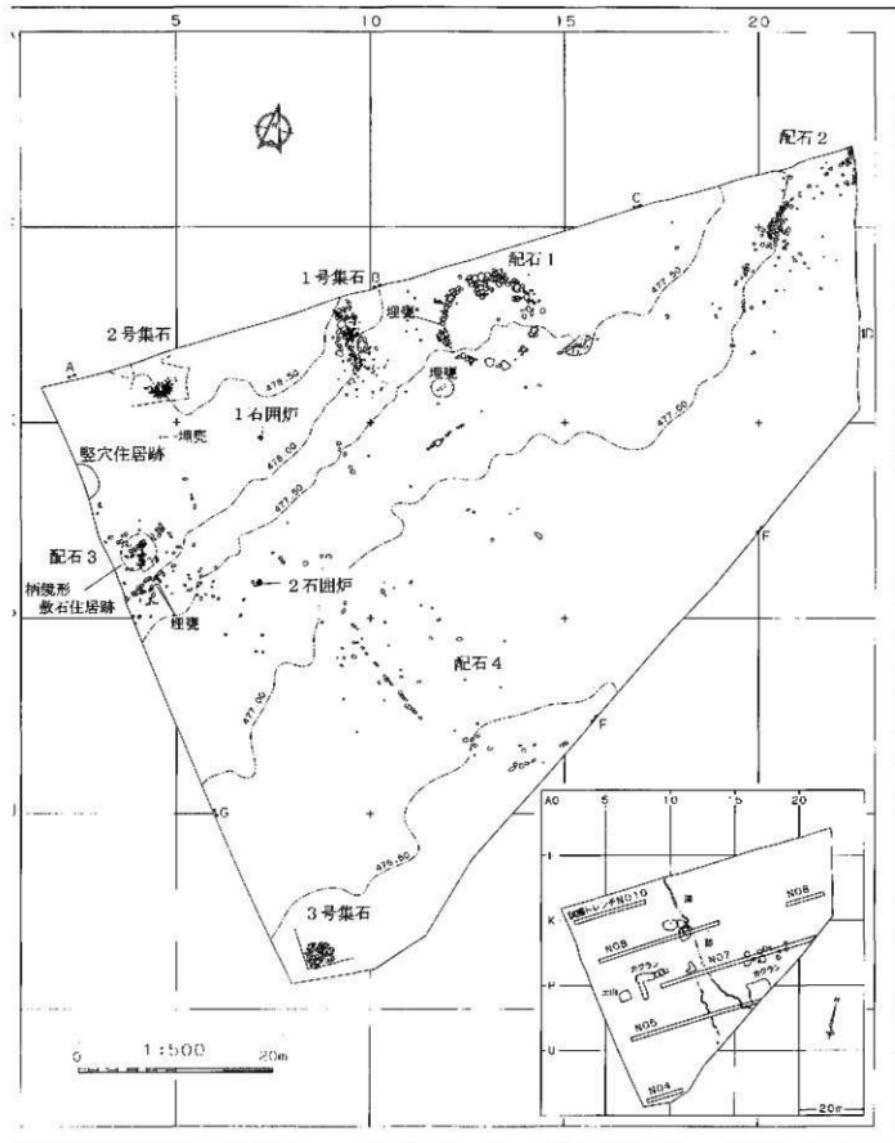
- 千軒木遺跡 岩和48年に県とEで検査した岩陰遺跡、縄文～平安の遺物を多数検出、県指定遺跡。
- 仁田・暮井遺跡 (L王) 縄文時代敷石を含む住居跡6軒、平安時代生居跡3軒。
(巻井) 縄文時代敷石を含む住居跡4軒と集落死石、平安時代住居跡1軒、中世溝跡、石垣等。
- 西野牧小山半遺跡 全國初の発見例である縄文時代中期末（加曾利E式土器を伴う）の石棒工房跡が検出され注目された遺跡。未完成品・破損品・完成品に至る各段階のものが124点出土した。
- 横川大林遺跡 縄文早期後半、絡み条体正直痕系土器を伴う土坑群、早期前半住居跡5軒、前期～中期住居跡4軒、近世畠跡等を検出。
- 原遺跡 奈良・平安時代住居跡5軒、溝2条。大形掘立柱建物跡1棟、遺構形態と立地条件より、東山道坂本駅家の可能性が指摘される。
- 横川峠の反遺跡 平安時代住居跡1軒検出。状況的に焼失家屋と考えられる。
- 五料瑞穂谷戸遺跡 奈良・平安時代住居跡23軒、掘立柱建物跡4棟、大形溝状遺構1条、馬跡3枚、道路・溝・井戸等が検出され、大形溝状遺構は道路の可能性が指摘されている。
- 五料野ヶ久保遺跡 縄文後期配石墓28基、堀之内・加曾利B・高井東式。住居跡は前期7軒、中期3軒、後期2軒と敷石遺構2基、集石土坑、埴生土器、奈良・平安時代住居跡2軒、溝2条を検出している。



第1図 周辺遺跡位置図



第2図 遺跡位置図と公共施設概略図

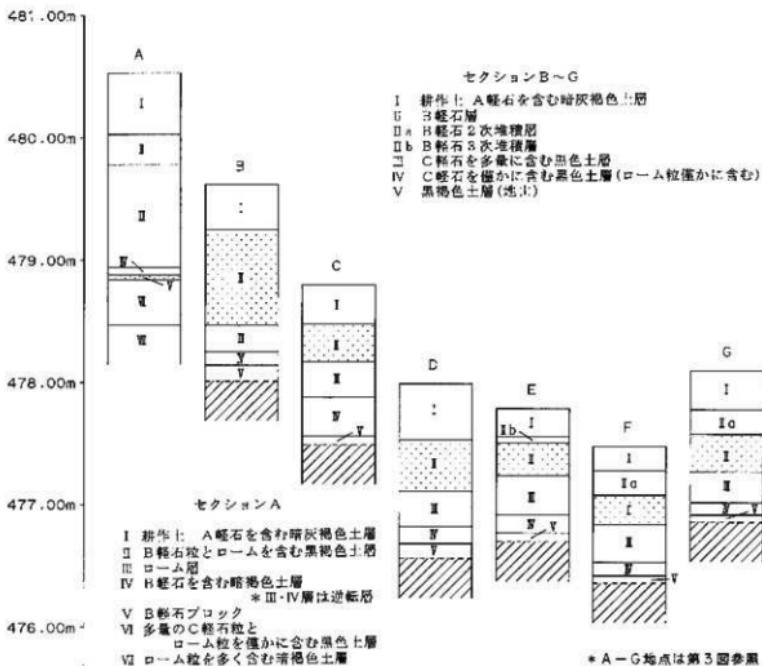


第3図 造構グリッド配置平面図と試掘トレンチ・溝跡図

- 9 五料平遺跡 平安時代住居跡7軒、土坑77基、溝4条、集石5基、上野型短頭査、円面鏡と多量の須恵器が出土。
- 10 五料丙小竹遺跡 銚文中期の配石遺構1基、平安時代住居跡1軒、土坑多数。
- 11 坂本城 本丸は東西60m、幅15m北側に低い土居、二ノ丸は東西3m、幅20m北と西側に土居が残っている。戰国末期の築城である。
- 12 愛宕山城跡 城は東西110m南北90m南側を除く三方に2~3mの高い土居がめぐる。天文16年武田勢により築城され天正10年大遠寺により改修、大正18年には上杉景勝もこの城に入ったといふ。
- 13 竜峯番所 坂本の西、愛宕山に当時の石垣が残っている。(碓水関所の派出見張り番所の役割)
- 14 板木宿 豊長年間計画的に新設された宿場町。宿の長さはおよそ700m用水路を中心に合計160軒。
- 15 離水廻所跡 元和9年(1623)江戸幕府によって現在池に廻所が移された。明治2年(1869)廃止された。
- 16 横川茶屋本陣 江戸時代の名主屋敷。參勤交代等で中山道(関所)を通行する大名が休息した所。
- 17 五料英屋本陣 江戸時代の名主屋敷、「お東」「お西」の2軒がある。
- 18 めがね橋(碓水第3橋梁) 径間18.3mのアーチ4連からなり施工基面から谷底までの深さ31.4m、橋長91.1mでわが國最大の煉瓦造りアーチ橋。

III. 基本土層

本遺跡の基本土層は第4図のとおりである。断面図AのIII層は他の断面図B~G中のV層の下の地山のローム層であり、IV層は他の断面図B~GのII層とV層の混上層である。この逆転層の範囲はI~8グリッドからM~2グリッドにかけての断面で見られる。この地域はB軽石層下後何らかの理由(地震・豪雨・山津波)



第4図 基本土層断面図

により泥流次第が生じ逆転層ができたものと思われる。また調査区内の土層断面実測地点BからFとCからE方向にB鉛石の一次堆積層が確認されている。これも上記と同理によってB鉛石の泥流状態が生じたものと考えられる。

IV. 発掘調査の方法

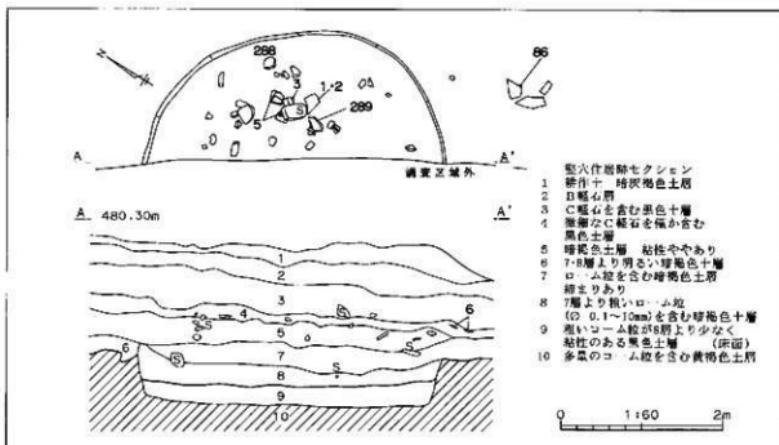
調査対象地は周辺の三角点からは急峻な山と樹木の成長により2点間の観測は不可能であった。更に付近に50万ポルトの送電線がありこの坂本地区では光波測距儀が使用できない。この様な状況にあって座標値を求めるにはGPS測量(Global Positioning System "汎地図測位システム")によるしかない。国土地理院4等三角点の記、点名芝原(2187-40) X37,485.360m Y-91,574.640mと関J1(416-53) X37,485.360m Y-92,781.610mを人工衛星を利用して観測する。このデータをもとに調査区内のK-2グリッドとK-20グリッドに移設した。K-2グリッド X39,393.392m Y-99,743.200m, K-20グリッド X39,405.143m Y-99,684.359mを測定した。遺物上げは「碓水跡くつろぎの郷公園整備事業」で使用している松井田町の任意座標による。調査グリッドは東西方向に算用数字(1, 2, 3...)南北方向にアルファベット(A, B, C ...)を付け北西交点をグリッド名とした。発掘調査は重機を用いて表土掘削、遺物包含層面で精査を行うこととした。住居跡等の遺構部分については土層観察用の珪を残し、層位や出土遺物の原位置に注意を払いながら掘り下げを実施した。水準点ベンチマークは1等水準点537号からH479.00mを測定した。

V. 遺構と遺物

1 積穴住居跡 (第5図、図版1)

位置 L-2グリッドで確認された。形状 ほぼ円形を呈するものと思われるが約半分が調査区外にかかるため全体を調査できなかった。状態は多量のローム粒を含み堅く結びた黄褐色土で立ち上がりは緩やかである。壁高は8~26cmを測る。覆土 ローム粒を含む堅く結びた暗褐色土層で僅かに炭化物を含む。周溝は見られない。径3.76m、床面積4.61m²を計測した。

遺物 (第7図、図版5) No.1~3 織文時代中期中葉の土器で、縄帶部に沈線を多車に沿わせ、曲隆線が文様の根幹に据えられた斜行条線が施された長野県御代田出土土器に酷似する。No.4 口縁部に三角形の隆起、肩部に斜行縦文と沈線を施す。No.5 二線部は「く」の字状を呈す、頭部の折れに歳形紋、肩部には細かな織文を施す。No.6 楠状工具による条線が見られる。その他に磨石等が出土している。



第5図 積穴住居跡実測図

2 梗鏡形敷石住居跡 (第6図、図版2)

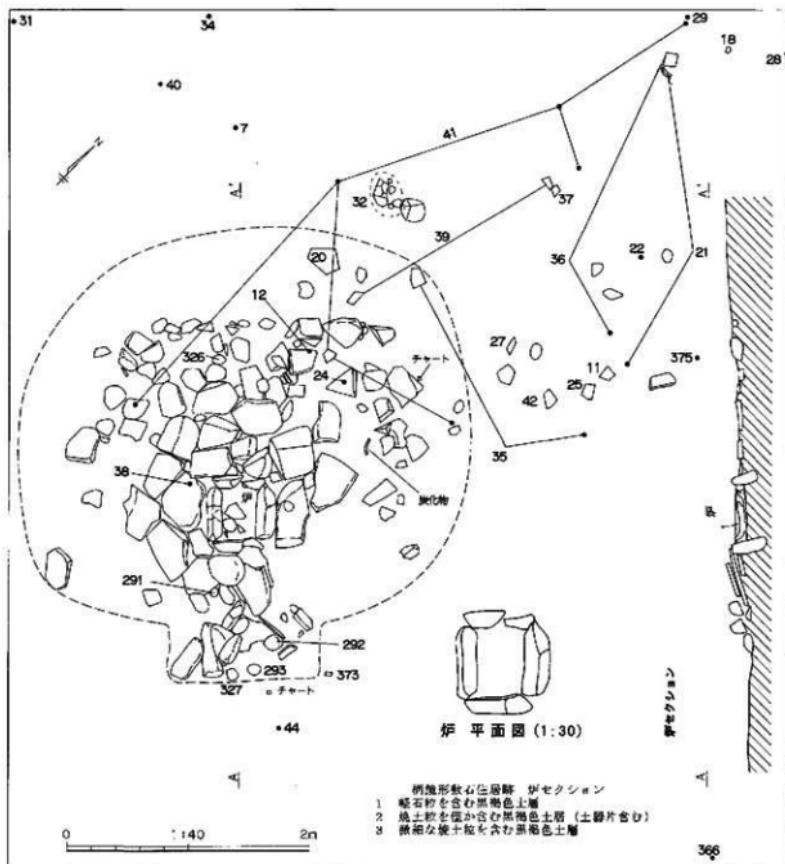
位置 8号トレーニ (試掘調査) の西端部M・N-3・4グリッドで壇状配石遺構3の下から確認された。

形状 南東方向に張り出し部を持つ梗鏡形の敷石住居跡である。南西から北東方向に長軸を持つ楕円形で長径は3.71m短径3.75m面積は10.75m²が推定される。

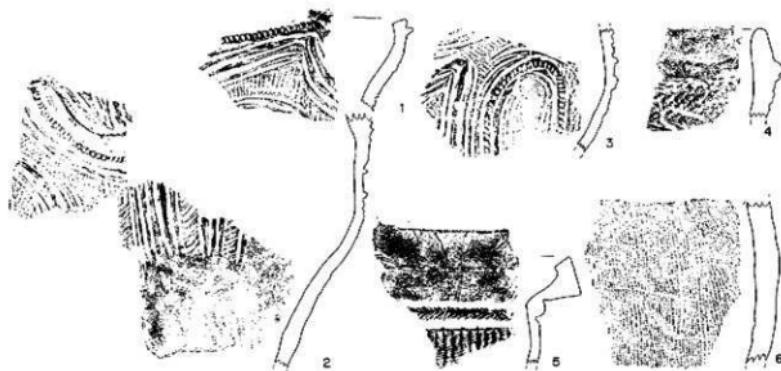
覆土 鹿石とローム粒を含む黒褐色土層が堆積している。

床面 刃石山産(扁平に剝離する)の自然石を敷石に使用している。炉の周辺の敷石は大きく、炉から離れるに従って小さな敷石を使用している。炉は細長い自然石5石で囲んでいる。北西方向に長径47cm短径23cm南東側の石は強い熱を受けひび割れている。柱穴は確認されなかった。

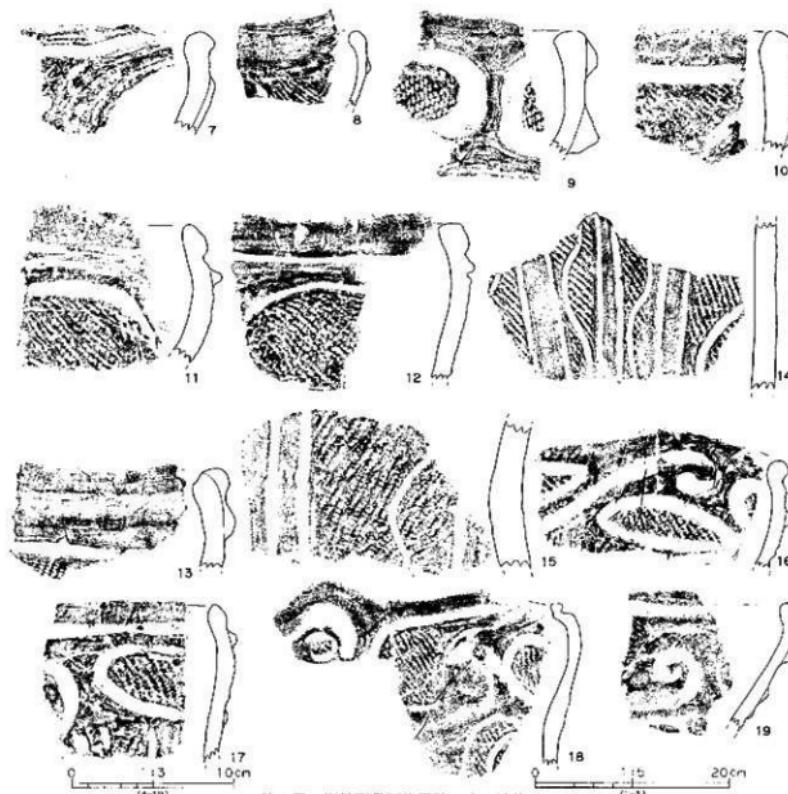
遺物 (第8~10図、図版5) №7~13 長鉄の二線鉄鑄帶による横円区画文、区画内には縄文充填。№14~15 深鉄の頭部、沈線により区画文を磨消、縄文帯にはS字状の沈線を施す。№16~19 キャリバー形深鉄の口縁部、溝文と隆脊による横円区画、区画内縄文充填。№20~22 頭~頭部 縄文と横円区画、区画内縄文充



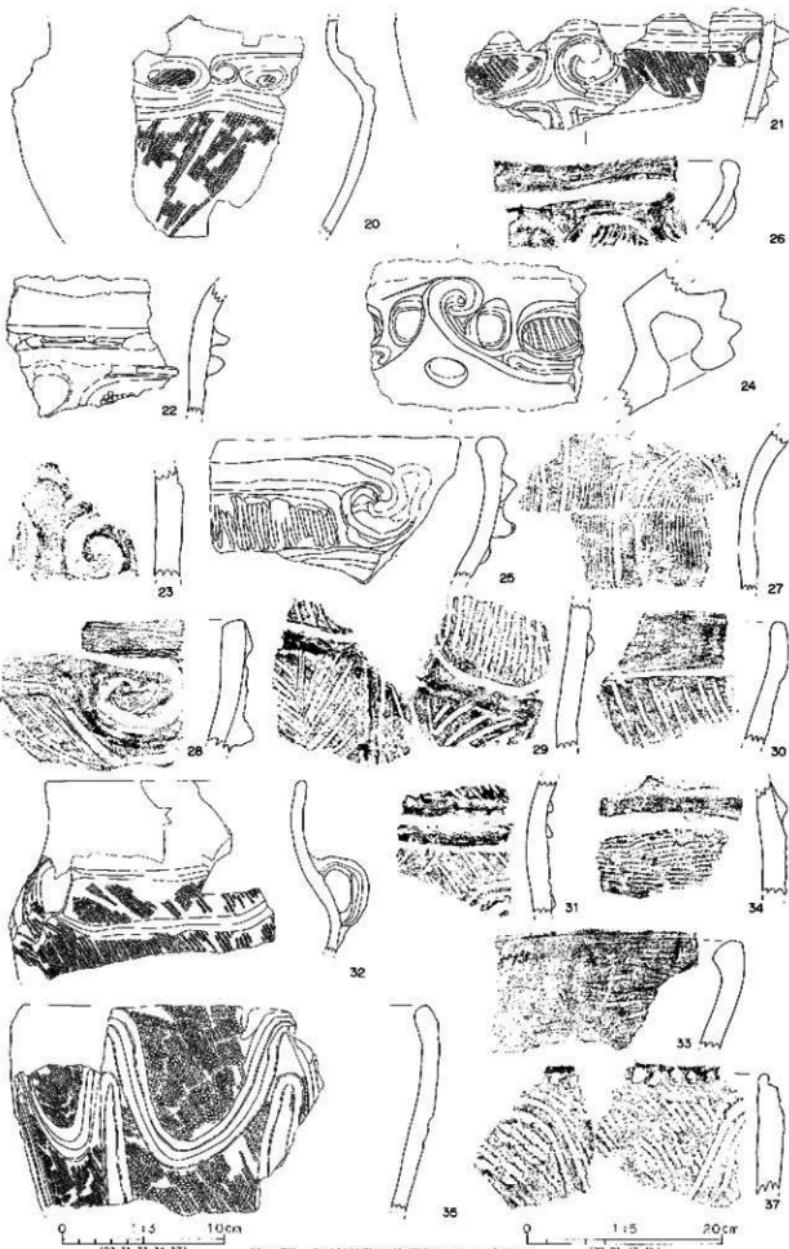
第6図 梗鏡形敷石住居跡実測図



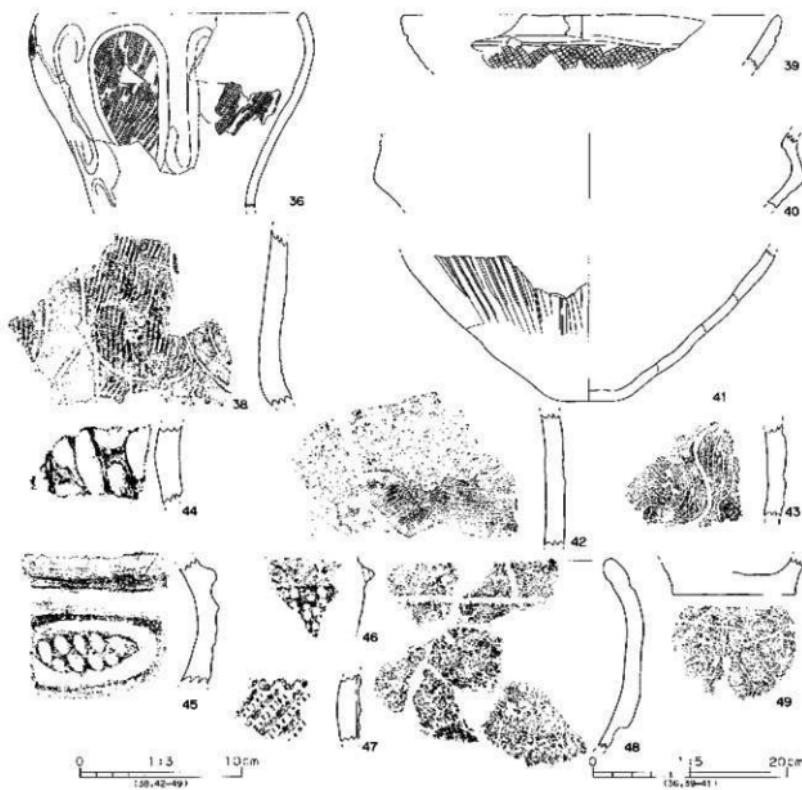
第7図 壁穴住居跡の出土遺物



第8図 柄鏡形敷石住居跡の出土遺物 1



第9図 柄鏡形敷石住居跡の出土遺物 2



第10図 柄鏡形敷石住居跡の出土遺物 3

図。20は胸部 RL の縄文施文、21は降帯文が貼られる。No.23～31 溝巻文を持つ口～頸部、口縁部は隆帯による区画文と溝巻文、区画内に斜行沈線を施文。27は沈線をアーチ状に垂下させ区画内は沈線を充填している。29の胸部は矢羽根状に沈線を施文。No.32～34 口縁部無文、頸～胴部隆帯で区画し縄文充填。32は頸～肩部に把手が付く。No.35 腹部全体に縄文を施文し二重沈線により区画する。No.36 アーチ状区画内ののみ縄文を残し他は磨消、S字状文を施文。No.37 LR 錐文施文後沈線削磨消、口唇部に刺突文。No.38 銀い沈線で区画しその間は磨消。No.39 口縁部に沈線それ以下は縄文施文。No.40 無文の浅鉢。No.41 浅鉢 胸下半部～底部、胸部は放射状に条線文、高温焼成。No.42 深鉢の胸部、矢羽根状の条線文。No.43 楯状工具による条線文の間にS字状の沈線施文。No.44 沈線間に太い押捺文。No.45 横円区画内に指頭T字痕。No.46 隆帯下部に刺突文、隆帯を貫通する孔が見られる。No.47 隆帯で格子状文を構成しその間に波状(階段状) 隆帯を施文。No.48 キヤリバー形の深鉢、口縁部に細い沈線を巡らす。二次焼成を受けており表面の文様は不明、一部着色痕あり。No.49 底部に葉脈痕。柄鏡形敷石住居の上に配石造構3が構築されたため遺物の散逸が起きたものと思われる。

3 環状配石造構

環状配石造構が4ヶ所確認された。舌状台地の中央部平坦面に環状配石1があり、それを2・3・4が囲うように「重の環状を呈するものと思われる。

環状配石造構1 (第12図、図版2・3) (①～⑨)の括弧内の数字は第12図の石の番号を示す)

調査区中央部北側のG～I-11～14グリッドに直径約10mの環状配石造構が確認された。

①方形敷石を伴う祭壇状組石 倍平な石8石 (111・114・117・120・121・123・127・129) と細長い石6石 (112・116・118・128・130・132) で1.5×1.5mの方形の敷石とその南端に偏平な石 (134) と立石 (131) が設置され、7石でその周囲を囲んでいる。(119)はこの敷石の既い石として組み込まれていたが何らかの事情で少し移動したものと思われる。その北側には大きな2石 (102・103) が南側に向いて設置され、両側に3石 (94・100・101と104・106・109) が細長い面を出して設置されている。

②門柱状立石 座標北に対し90°方向に門柱状の2個の立石 (71・93) が設置されている。

③石碑状立石を伴う壙石 (56) は供物を供える壙状を呈し、(57)はその後背状に傾斜して検出された。構築時は垂直に立っていた可能性が考えられる。

④石棒を伴う石組 (25・26) の周辺には多孔石・凹石・石棒片と数個の石が検出された。

⑤台(壇)状組石 ⑥ (13・14)を平らに据えるために (17・18)他5石が使われている。⑦ (10)を支えるのに4石。⑧ (5・6)を根石とする大きな石が設置されていた可能性が考えられる。⑨ (3)を支える1石。⑩ (1)は1個で遺定している。⑪ (204～207・210)他8石が検出された。

⑦形象組石 (181・186・187・196・198・201)を中心にして複雑に組み合わされた組石。

⑧形象絶石 丸石を使用した頭部 (179) 胸部 (177) 腕 (176・178) 腹部 (175) 脚部 (155～157・170・171・173)。(177・179)の下に埋甕 (No56) が伏せた状態で検出された。この配石下から検出された埋甕は1個であった。

⑨その他の組石 (145)の上に (144)、(146)の上に (143)を組み (138)は丸石を使用。H-13グリッド内に中心を置き (104・106・109)を結ぶ線を基準とし、組石の間隔から12分割を意識しているものと思われる。

遺物 (第11図、図版5・6)

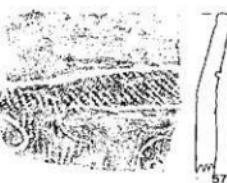
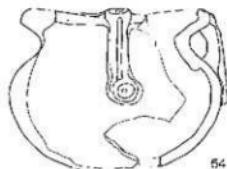
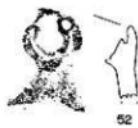
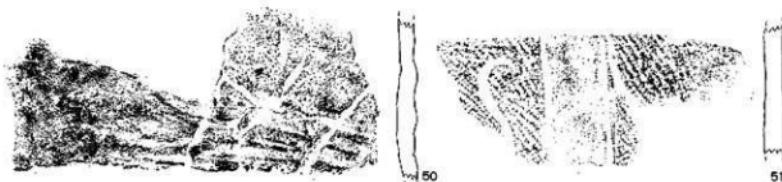
No50 腹部沈線文。No51 腹部懸垂文の間を磨消、縞文帯にはS字状沈線を施文。No52 口縁部の飾り突起、円形刺突文を沈線で結び土器の内側を向くものと思われる。赤色塗彩痕あり。No53 口縁無文、口縁下から腹部は沈線文。No54 口縁から底部1/3残、全体堅薄質、把手両端はボタン状貼付、把手付きの小形窓。No55 刷下半部、沈線による懸垂文、縞文と磨消を交互に施文。No56 酒石の177と179の下から出土した埋甕で底部は欠損し、底部を上にして出土。調部に2ヶ所僅かな折れを持つ。縞線による横凹区画文を施し区画内は斜行縞文を充填、縞線の交点中央に指頭圧痕。腹部の懸垂文(沈線)間は先端が旗手式に屈曲する。旗手文は内向きと右向きを交互に繰り返す。尖頭岡右側の懸垂文は肩下半部で方向を変えて引き直されている。全体に焼成は弱く胸上半部から口縁部の2/3は殆ど焼いていない状態で検出された。胸下半部の焼成は良好で焼成後着色されている。No57 口縁は僅かに波状を呈す。沈線による横凹区画文内は磨消縞文。No58 縞帶による横凹区画内に縞文充填、縞帶に指頭圧痕。No59 土製円盤。No60 頸～腹部、沈線による渦巻文内は磨消。No61 底部網代底。No62 底部葉脈底。

環状配石造構2 (第13図、図版3)

大きな物は70×30cmの細長い石と人頭大から拳大の安山岩・砾を使用している。調査区北の隅から26m程で列石が希薄になっている。D-22、E-20、G-19グリッド内の配石は等高線に沿って半径30m程の弧を描く。

遺物 (第14～15図)

No63-1・2 口縁部の縞帶で横凹区画。区画内LR縞文充填、縞帶内に大きめの指頭圧痕。No63-3・4 頸～胸部沈線区画内に磨消、縞文帯にS字状懸垂文。No64 口縁部、楕円区画内に縞文充填。No65 口縁部、楕円区画内に縞文充填。No66 口縁～胸部、器面全体に縞文施文、沈線による横凹区画文。区画文の間に円形刺突文2個を施文。No67 腹部、平行沈線間を磨消、縞文帯にはS字状文施文。No68 波状口縁部、茎带区画の間に刺突文2個。No69 頸～胸部、頸部に2本の縞帶を巡らし肩部は縞文施文。No70 口縁～頸部、沈線の曲線と矢羽根状の文様帶。No71 口縁部、縞帶による横凹区画。区画内に沈線施文。No72 口縁部に縞帶による条縞、全体に施文。No73 口縁部、沈線と縞帶、縞帶内に刺突文。No74 口縁～胸部、口縁部に膨らみを持ち

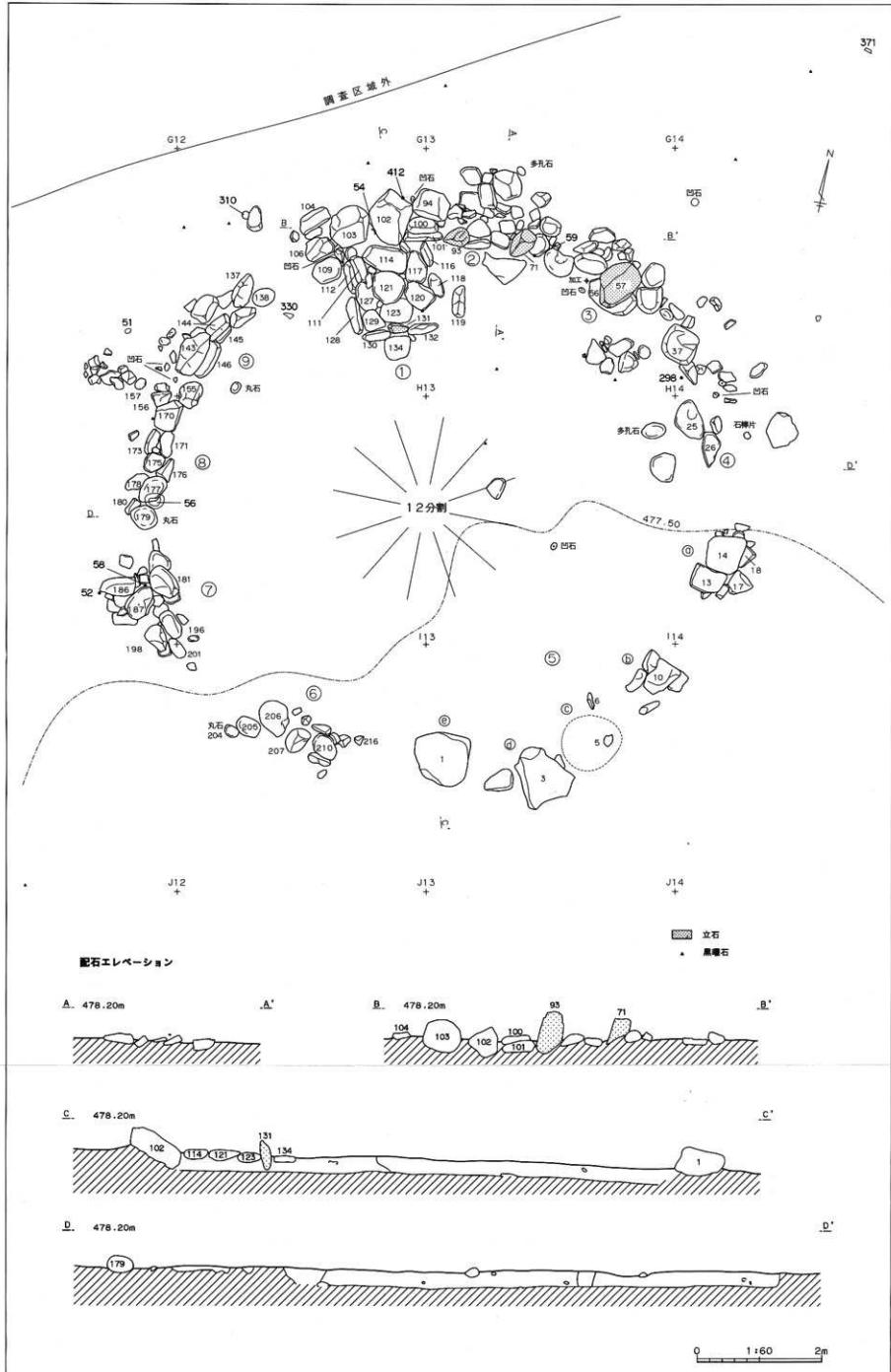


0 1:2 5cm
(50)

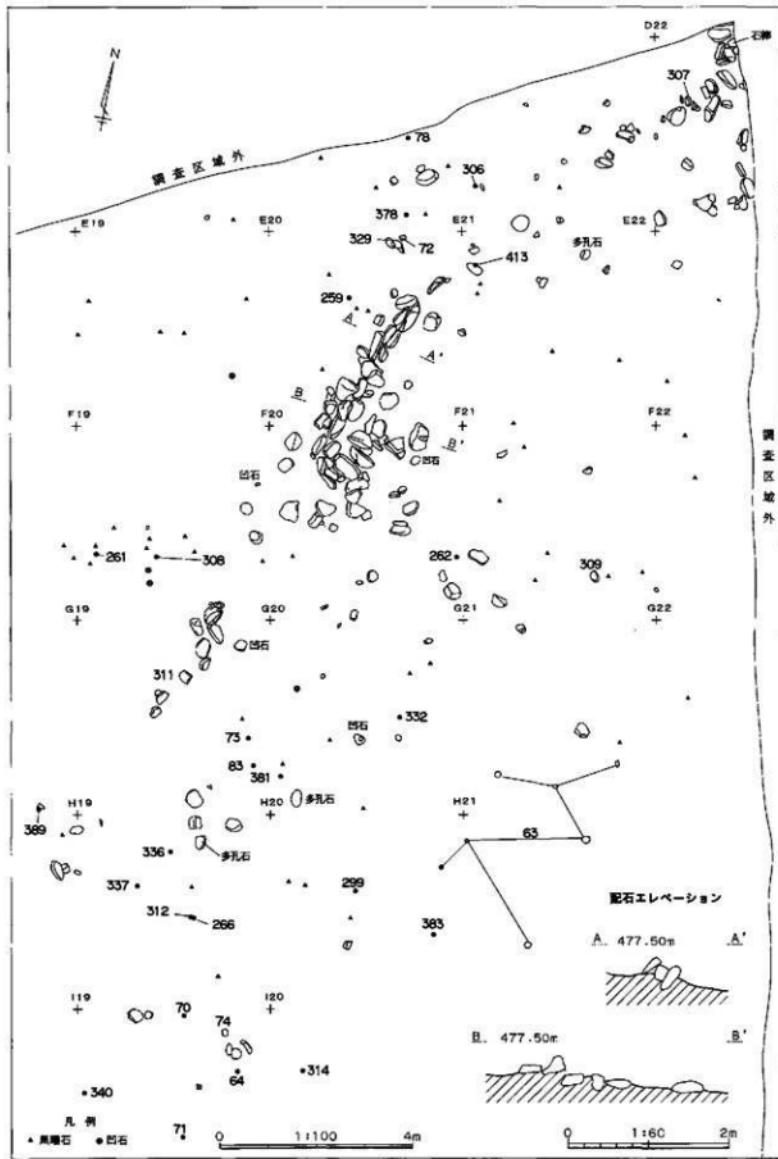
0 1:3 10cm
(50-55.57 60)

0 1:5 20cm
(50)

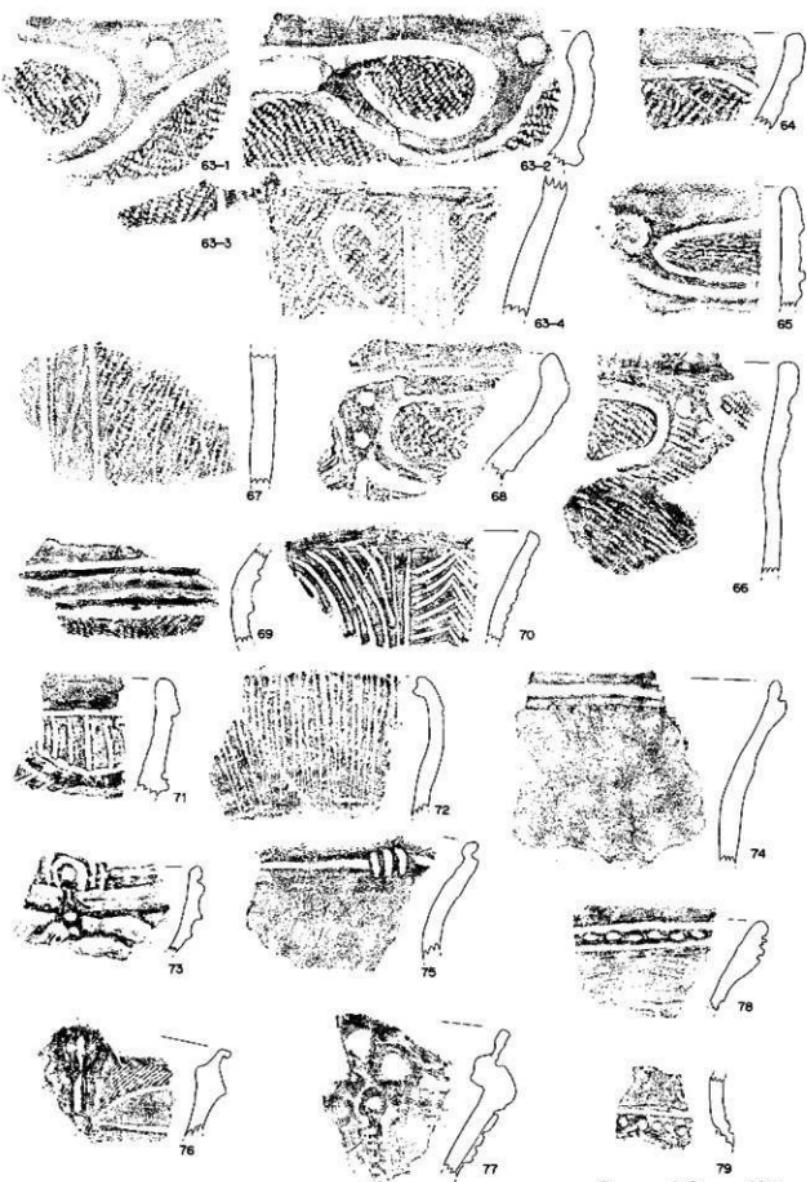
第11図 環状配石構造 1 出土遺物



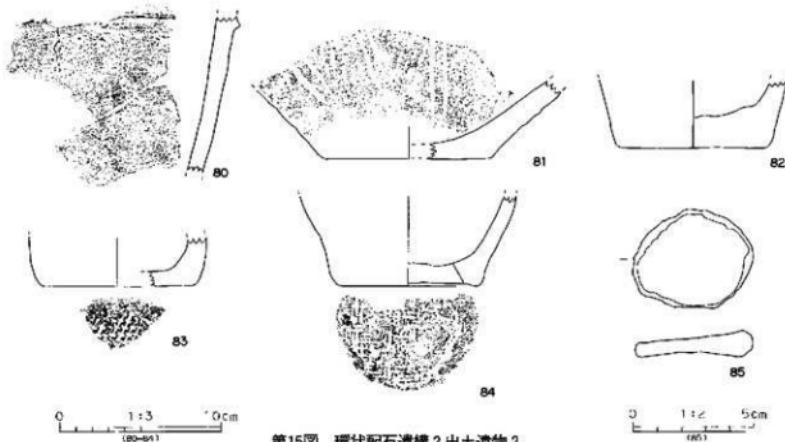
第12図 環状配石遺構 1 実測図



第13図 現状配石造構2実測図



第14図 環状配石造構 2 出土遺物 1



第15図 環状配石遺構2出土遺物2

段差がある、内外面無文。No.75 口縁部は波状を呈す。口唇部に沈線、波状突起部に継に3本の沈線を施す。No.76 口縁部は吊り手状降帶に懸垂、煤付着、区画内磨消。No.77 口縁部は厚く波状を呈す。吊り手状の茎帶を垂下させ虹み目を付ける。内外面に刺突文あり。No.78 口縁部に2条の沈線を巡らしその間に径3mm型の竹管を嵌めに刺突し列状を呈す。刺突内に竹管の中空部の凸痕を残す。No.79 頂部に2条の沈線を巡らし沈線間に連続刺突文施文、中空痕。No.80 頂～腮部、無文、内外面擦れ、表面煤と焦げ跡が日立つ。No.81 高部、全体に纏文施文、沈線内に磨消。No.82 底部無文。No.83 底部縫合痕。No.84 底部網代痕、底部と腮部の接合痕。No.85 土製円盤、土器片の再利用。

環状配石遺構3 (第16図、図版3)

M-3、N～P-3・4グリッドに直径10m程の環状配石遺構が確認された。N-3・4グリッドの境界線付近に自然石が數個から10数個が組になって検出された。O-4グリッド付近の石は土坑の周囲を囲う石と思われる。周辺には石棒片、多孔石、凹石、石鐵そして黒曜石片が多数出土している。配石下からは柄錐形敷石生居跡1軒と土坑4基が検出された。配石3は敷石生居より新しく、半分以上が調査区外にはいる。石が小さく配列が乱れており、はっきりした組石は確認することはできなかった。

遺物 (第17図、図版6)

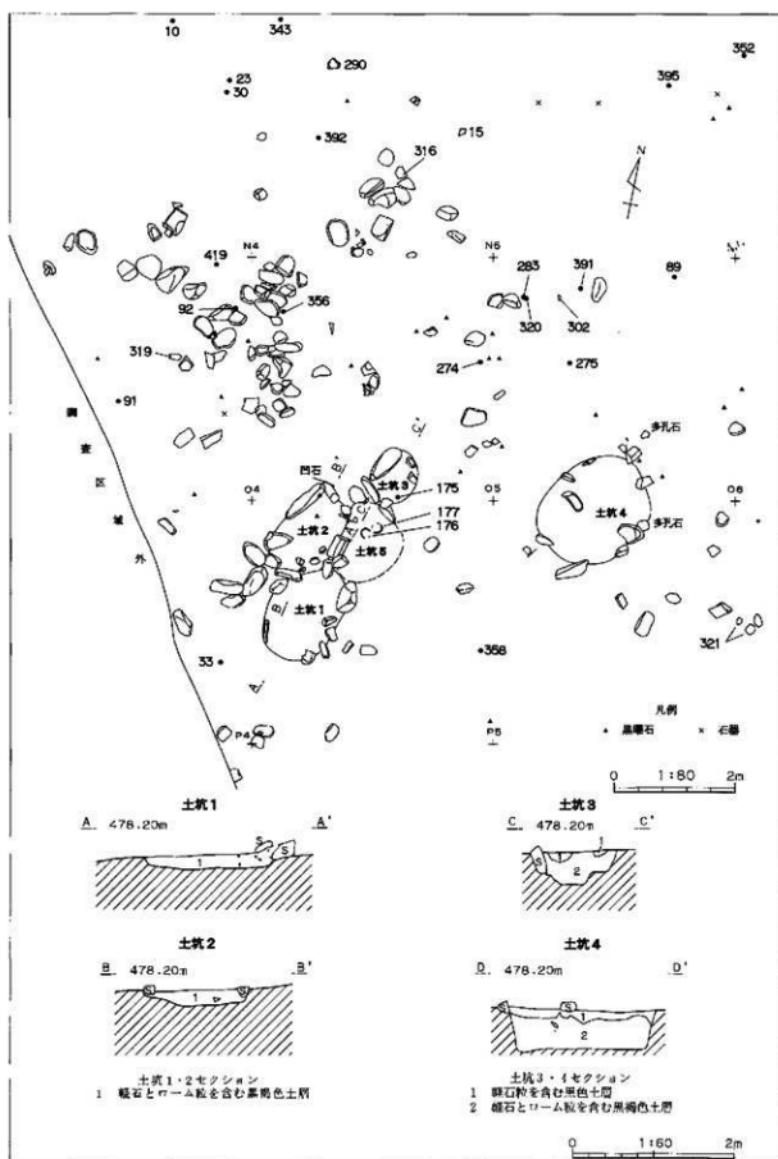
No.86 口縁部墻帯による横円区画内に纏文充填。No.87 口唇部の太い葉帶は「の」の字形に上下から交互に入り組み区画内に纏文充填。No.88 口唇部無文、沈線を巡らし腮部は纏文施文、アーチ状の区画内は磨消。No.89 やや厚手の口縁～頸部、脇帯により横円区画と満巻文を施文、区画内は弧状沈線を施す。No.90 脊部、長さ1～2cm幅3mm沈線を1～2cm間隔で縦状に施文。No.91 脊部、LR 繩文充填後磨消、その後矢羽状沈線施文。No.92 無文土器、表面に煤焦げ付着後の穿孔、補修孔。

環状配石遺構4 (第18図、図版3)

O-9～11、P-9、Q-10、R-10～12・15、S-12～14グリッドに位置する。1辺25mの括弧状の列石が確認された。この配石はやや大きめの自然石の長い方を一列に並べ途中に丸石や石棒片を置きその周辺に多孔石、凹石、石鐵、石斧及び剣片、黒曜石と僅かであるがチャートがP-9・10、Q・R-10・11とR・S-12・13グリッドに集中する状態で検出されている。O-9からS-13グリッドの約16m間で60cmの標高差がある。

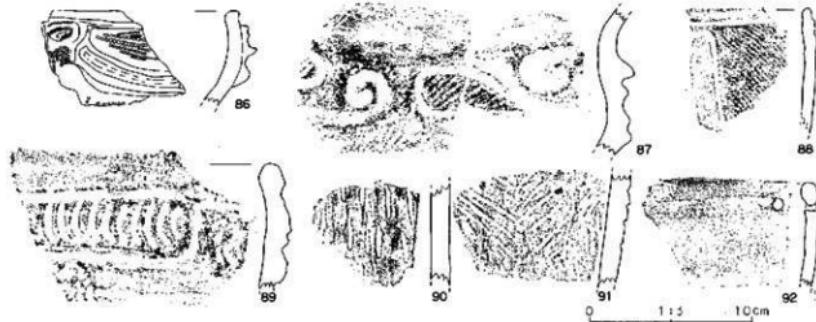
遺物 (第19・20図、図版6)

No.93 脊部、纏文帯と磨消を沈線で区画。No.94 口～腮部、横円区画内と腮部に纏文施文。No.95 頭部を平行沈線で区画し磨消、口縁と腮部にはRL 繩文施文。No.96 口縫部、幅広い沈線で区画し磨消、口唇部無文。No.97 降唇満巻文、横円区画内は斜行沈線を施文。No.98 沈線により又画し纏文帯と磨消を区分する。No.99 弧状沈線内は磨消、他は細かな纏文を充填。No.100 沈線による区画内磨消、他はLR 繩文施文。No.101・102 沈線

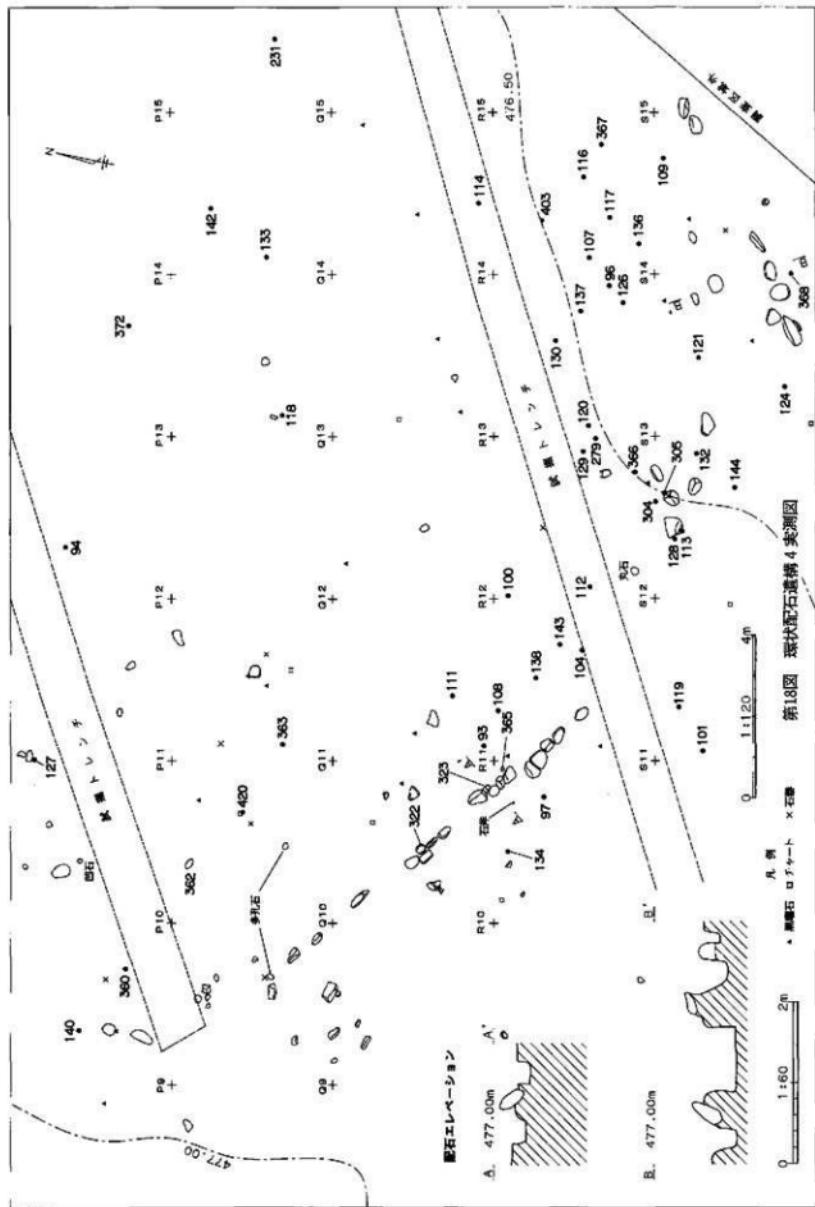


第16図 環状配石造構3・土坑実測図

による区画内磨消。他は RL 繩文施文。No.103 沈線による区画内磨消 LR 繩文。No.104 沈線で区画 RL 繩文施文。No.105 内傾する浅鉢の口縁部、梢円区画内繩文施文、梢円区画間に円形刺突文施文。No.106 円形刺突文と沈線による梢円区画、繩文は見られない。No.107 口縁部は外反し口唇部に円形刺突文、頭～鰓部に沈線を約1.5cm間隔で施文。No.108 口縫部に連続刺突文。No.109 口縁部に2条の沈線を巡らす。器面は丁寧な横撫。No.110 2条の沈線を口縁部に巡らし口唇部と頭～鰓部に向かって沈線で区画文を配す。No.111 波状口縁突起部。No.112 薄手状の溝谷文から懸垂文、沈線区画内は5条1単位の横書き文。No.113 口縁部に穿孔、沈線と刺突文を施文。No.114 波状口縁突起部。No.115 波状口縁の突起部、刺突文(外面4、内面2)。No.116 漏斗状の口縁部飾り突出部に刺突文、煤・焦げ付き痕。No.117 口縁に沿って沈線を巡らし波状口縁の突起部に継ぐ沈線と刺突文を施文。No.118 波状口縁の浅鉢、突起部に梢円形穿孔(径1.7cm)の左右に円形刺突文(1cm前後)を飾り付けている。No.119 口縫部の飾り突出部、沈線と刺突文施文。No.120 口縫部の飾り、両面円形指凹压痕、正面と側面に2本の沈線がA~D矢を呈す。No.121 波状口縁、波頭部円形刺突文と大きめの穿孔により口縫部を飾り、口縫部から垂下する隆脊は刺突文を連続させ鎖状を呈す。内面にも刺突文あり。No.122 小形壺、口縫～頭部に継ぐに舟手状隆脊を垂下し舟輪を弄むように沈線を配す。No.123 波状口縁の突起部、口唇に沿い溝状の沈線を巡らし波頭部突起に3本の沈線と2個の円形刺突文を左右対に付ける、煤付着。No.124 口縫突起部、沈線と刺突文、純い黄褐色が基調で焦げ付き黒色と焼けた明赤褐色がある。No.125 波状口縁に沿って沈線を巡らし波状突起部に刺突文を付ける。頭部はやや太い沈線が斜行する。No.126 波状口縫に沈線を巡らし突起部に刺突文と継ぐ沈線を施文。頭部は無文。No.127 波状口縫に沈線を巡らし突起部に刺突文を数個(1個は穿孔)配している。No.128 口縫部に沈線を巡らし頭～鰓部は無文。No.129 口縫部は沈線を巡らしその下部に並行して隆脊を巡らす。頭～鰓部の境目に沈線が見られる。No.130 口縫はやや内湾気味で沈線と隆脊を巡らす。頭～鰓部は無文。No.131 口唇部は膨らみを持つ、無文。No.132 波状口縫突起部に隆脊・渦巻・東突を組み合わせ、刺突文を出発点として舟手状に沈線を巡らす。内外面に赤色映彩痕あり。No.133 口縫～頭部、口縫に隆脊を巡らし全体に繩文施文後(やや固まってから)磨消された。No.134・135 波状口縫突起部、隆脊渦巻文と沈線の組み合わせ。No.136 浅鉢形口縫部突起文、内外面丁寧な撫調整。No.137 緩い波状二縫、沈線の上下に刺突文を施文、頭部は磨消。No.138 波状口縫の浅鉢突起部、口縫に沿って沈線を巡らし波頭部に径8mmの穿孔あり。No.139 二脣部は無文、頭部に斜め方向から竹管による刺突文。No.140 高台付底部、内外面撫。No.141 浅鉢の波状口縫の突起部、側面に沈線。No.142 No.141と胎土・焼成とも類似することから同一個体と考えられる。口縫部突起に2個の穿孔あり。No.143 浅鉢の底部、無文。No.144 繩文施文後隆脊貼付、隆脊部撫、内面に炭化物が2~3cmの斑点状に薄く付着している。栗か板の実の煮焦げ痕と思われる。No.145 土縫、焼成後の穿孔。No.146・147 土製円盤、側面に磨り痕。上器片の再利用。



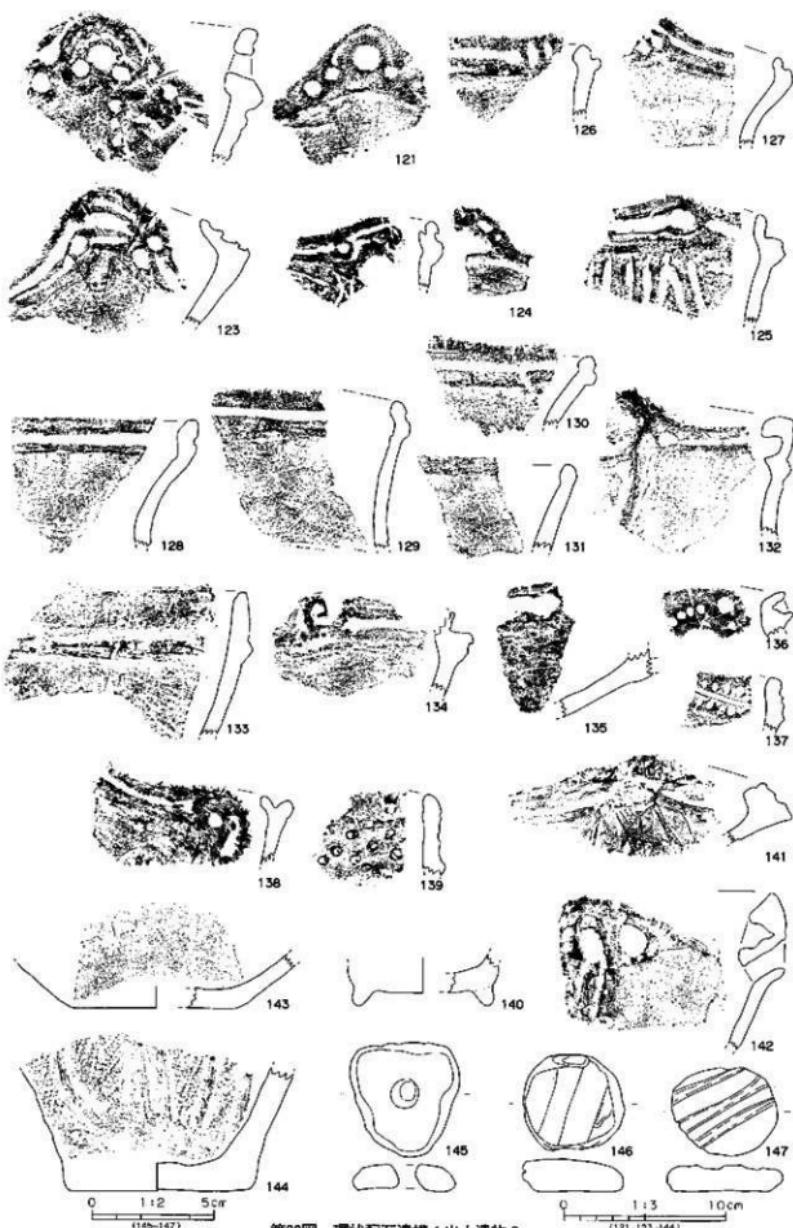
第17図 環状配石造構3出土遺物





第19図 環状配石遺構4出土遺物1

0 1:3 10cm

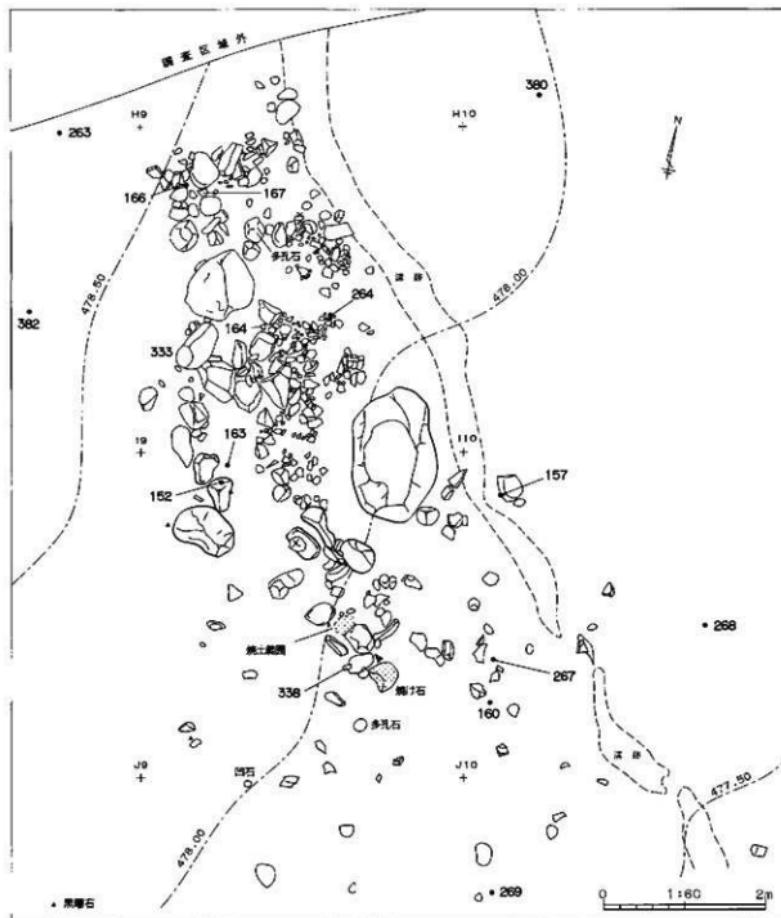


第20図 環状配石造構4出土遺物2

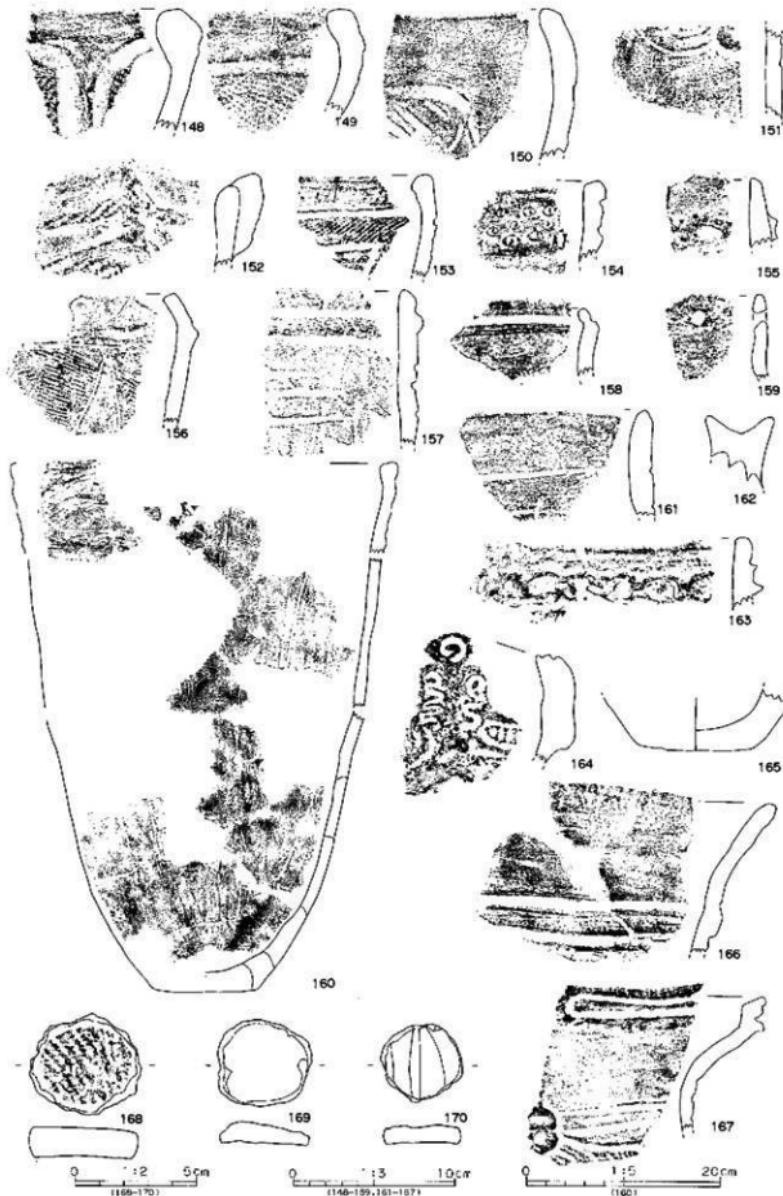
4 集石

1号集石 (第21図、図版3)

G・H-9、I・J-9・10グリッドに位置する。大きな自然石の周辺に多孔石・凹石・石鍼・敲石等が混入した状態で検出された。I-9グリッドでは灰と焼上が検出されている。H-9グリッドの多孔石は60cm以上ある大きな石に密みが確認された。H-10グリッドの石は0.9のバックホウでも容易に動かせないほどの大さな石であった。周辺から集めた石の一次加工の場所として使ったものと思われる。この遺構は小さな谷地状を呈している。B軽石堆積後、調査区を北から南に流れる渓谷状態がセクションで確認された。C-EとB-F (第3・4図参照) に流动した状態が見られた。(この断面を新潟大学の大塚富男教授は液状化現象として1997年12月18日来訪調査した。)



第21図 1号集石実測図



第22図 1号集石出土遺物

遺物（第22図、図版7）

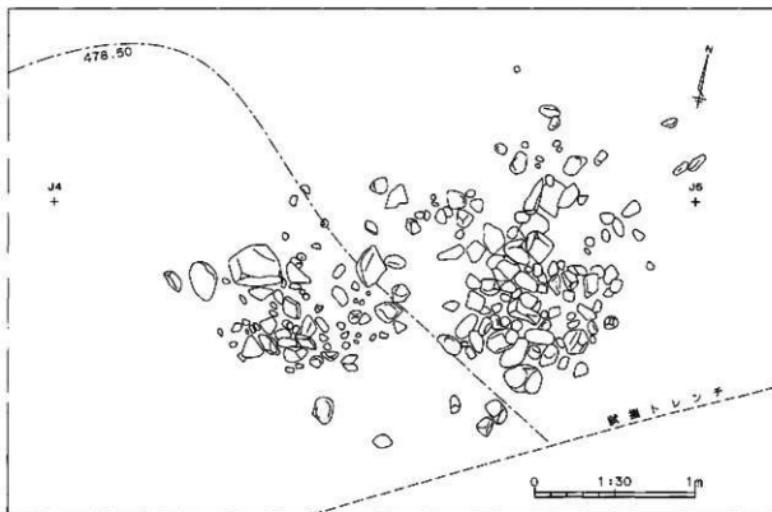
No.148 厚手の口縁部、横円区画内に斜行縄文充填。No.149 口縁はやや厚く内湾する。頸部に太めの沈線が一巡し、その下に LR 繩文施文。No.150 口縁～胴部、楕円区画内に斜行沈線施文。No.151 頸部、沈線による曲線文施文。No.152 波状口縁、脇帯による横円区画を2段に作り脇帯上に RL 繩文施文。No.153 口縁部に沈線を一巡させ頸部は沈線で区画し磨消。No.154 口縁部に竹管で刺突文を3列施文（左方向から刺突）その下に脇帯。No.155 口縁に沿って連鎖状の脇帯が巡る。No.156 LI縁は内湾する、頸部脇帯から三角形に細い沈線を牽引させ磨消。細かな繩文を LR 方向に施文。No.157 LI縁～脇部、不規則な沈線を縦横に施文。No.158 口唇部に沈線を一巡させ他は無文。No.159 波状口縁の突起部穿孔、外面に繩文と条線が僅かに見える。No.160 脣～底部、5条の櫛状工具により波状条線文をS字状に施文。同一個体と思われる口縁部は墻壁による横円区画内に波状条線文を施文、口縁～胴部は煤と二次焼成により黒色、胴～底部は橙色～褐色を呈す。No.161 口縁部無文、頸部に沈線施文。No.162 口縁部の飾り突起、丁寧な綴の磨消、煤付着。No.163 口縁部脇帯、貼付後指揮さえが連鎖状を呈す。No.164 口縁部の飾り突起部分、沈線によりS字状文を施し小横円区画内に綴位の沈線を充填。No.165 底部。No.166 口縁部は外反し、口～頸部は無文、頸部に2条の沈線を巡らしその下部に太めの RL 繩文を施文。No.167 波状口縁に2条の沈線を巡らし、頸部の刺突文から3条の沈線が横方向に施文され、その下部には弧状沈線が3条施されている。No.168 繩文が残る土器片を加工した土製円盤。No.169 無文土器を加工した土製円盤。No.170 沈線のある土器片を加工した土製円盤。

2号集石（第23図、図版4）

最大でも長辺が20cm、小さな物は1～2cmの岩が1・J-1グリッドで確認された。殆どの石が10cm以下で熱を受けている。土器の出土はない。ロームとバミスを多量に混入する硬く縮まった黄褐色土が第3区に点線で表記したように集石2を区切っているのが確認された。焼け石による煮物に使用した石と考えられる。2号奥石南側のK-4グリッドからは正位の埋立が出土している。

遺物（第24図、図版7）

No.171 頸部に横円区画文、胴部は脇帯による渦巻文の間を斜行沈線で充填。No.172 やや厚手の口縁～胴部、幅広の沈線間に繩文充填、口唇部と胴部は磨消により無文。



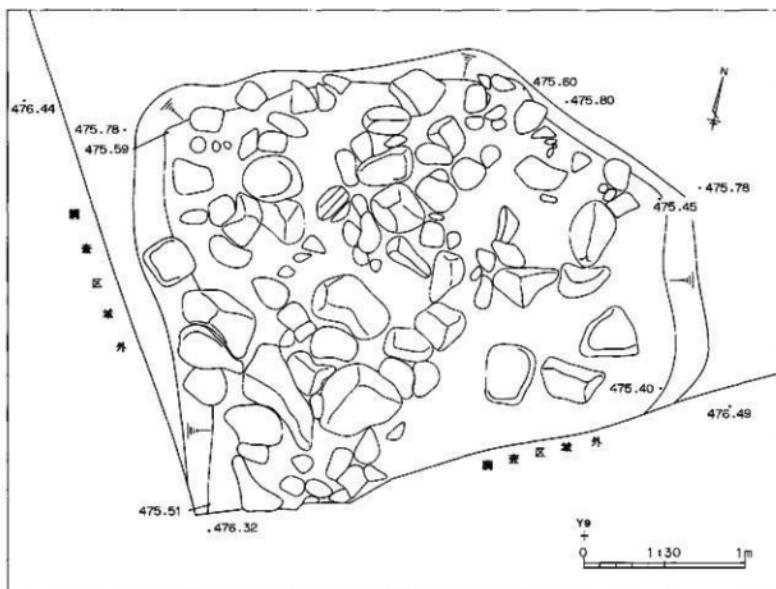
第23図 2号集石実測図



第24図 2号集石付近出土遺物

3号集石 (第25図、図版4)

X-8・9グリッドから河原石(角の取れた自然石安山岩)による集石が確認された。2号集石からは2.91~3.10mの標高差がある。配石4からは0.91~1.10mの標高差があり、土層も硬く締まったローム粒を多く含む暗褐色土層の下である事から2号よりも古い集石と思われる。



第25図 3号集石実測図

5 石圓炉

検出された右圓炉は燃焼の痕跡が認められないこと、2号石圓炉は丸石を伴うことから祭祀のために設置された炉と考えられる。

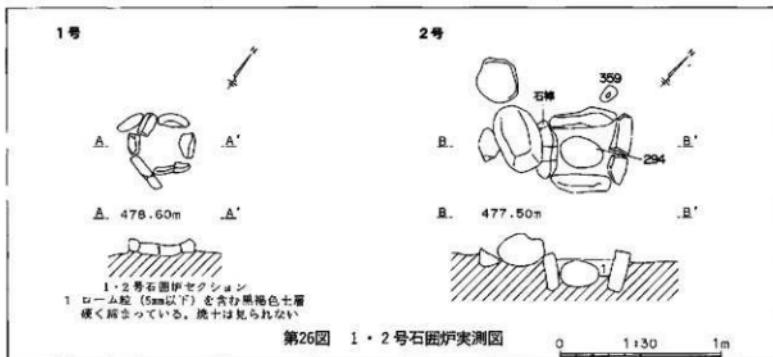
1号石圓炉 (第26図、図版4)

細長い7石で五角形を呈する炉がK-6グリッドで確認された。炉内の土層からは焼土や炭化物は確認されなかった。周辺には自然石も見あたらず炉だけが確認された。

2号石圓炉 (第26図、図版4)

細長い5石で四角形を呈する炉がO-7グリッドで確認された。炉の西側に3個の自然石が確認されたが、既穴生磨跡のような掘り込みは確認できなかった。炉内の覆土は焼土炭化物等の燃焼の痕跡は確認できなかった。炉内いっぱいになるような丸石が入っており、その下は地山の黒褐色土層であった。

当遺跡では丸石は祭祀とかかわる遺構から出土しており、丸石が検出されたことは、この炉が燃焼の場ではなく祭祀の為の炉であったと考えるのが妥当であろう。



第26図 1・2号石圓炉実測図

0 1:30 1m

6 土坑 (第16図、図版7)

1号土坑 O-4グリッドに位置し周囲を自然石で囲っている。南側の石が小さく方向もあまりしっかりしていない。

遺物 (第27図) №173 厚手の口縁から頸部、内外面無文、赤色塗彩痕。№174 厚手の洞部、沈線区画内磨消。

2号土坑 N-O-4グリッドの境界に位置し比較的よく自然石で囲われている。

3号土坑 N-4グリッドに位置し、一番小さな土坑である。南側の石用いが不鮮明である。

遺物 (第27図) №175 口～頸部は繩文充填後漫巻文、横凹区画と列点文を施す。腹部は繩文充填後アーチ状沈線文の中を磨消。

4号土坑 N-O-5グリッドの境界に位置する。石用いも不鮮明であり土坑の床もあまりはっきりしない。付近から多孔石が2個出土している。

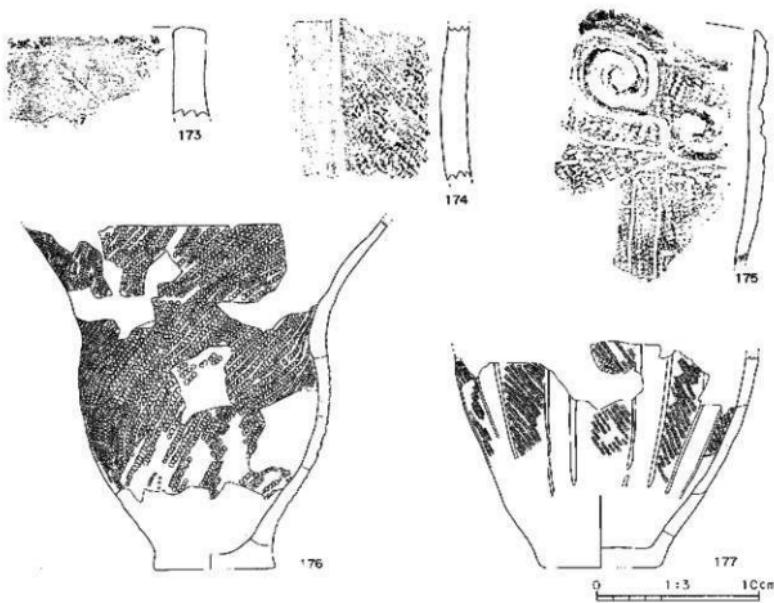
5号土坑 O-4グリッドに位置する。3個の石笠びと埋甕の出土等から土坑と考えられる。

遺物 (第27図) №176 頸部に強い折れをもつ鉢、地文はRL繩文、底部付近は丁寧な磨き後赤色塗彩。№177 剥下部～底部、地文はLR繩文施文、沈線区画内は磨消。№178は欠番

VI. その他の遺物

1 繩文土器 (第28～31図)

№179 (E-17) 頸部、溝巻文。№180 (F-16) 小型鉢底部、外面無文、底部に葉脈痕。№181 (G-17) 口唇に沿って沈線を巡らし、3個の刺突文の跡らみは3cm程の瘤状を呈する。頸部と副部の境に2条の沈線が見られる。№182 (H-16) 折り返し口縁の無文土器。№183 (H-15) 頸下半部、並行沈線間は磨消、繩文帯はRI、炭化物付着。№184 (II-16) 沈線と縦帶で吊り手状や「川」の字状の文様を口縁部に施文、縦帶に浅い刻み目あり。№185 (H-16) 頸部、沈線区画内に細かい繩文を充填、副部には逆「の」の字状。№186 (H-16) 注口十唇の注口部。№187 (I-16) 吊手状の沈線と刺突文、横状把手の取り付け。№188 (I-15) 底部、網代痕。№189 (I-16) 沈線による溝巻文、刺突文。№190 (I-13) 底部、葉脈痕あり (拓本のみ)。№191 (J-11) 口縁部に連鎖状の縦帯(幅約1cm)が巡る。肩半位の削れ目に輪積の指頭圧痕明瞭。その他無文。№192 (J-7) 外面溝巻文、内面縦位の撚。№193 (J-7) 把手付き壺、蔽手状縦縫文の間に横円区画を施文、漬



第27図 土坑出土遺物

手文の腰の区画内は繩文充填。No.194 (J-17) 頸部に2条の沈線を巡らしその下に三重の半円形を施文。No.195 (J-18) 深鉢の口縁付近、深く強い溝巻文と隆帯上端に斜行沈線充填。脛部上端に繩文施文。No.196 (J-17) 頸部は平行沈線間に5~8mmの刺突文を施し脣部は細かい繩文を縦に施文。No.197 (J-12) L~頸部は繩文充填後磨消、半截竹管による平行沈線、脣部に隆帯が一巡する。No.198 (J-20) 口縁部の沈線区画内は幾位の沈線を施文。隆帯貼付。No.199 (J-16) 大きめの円形刺突文を波状口縁部に連ね、口縁から垂下する隆帯にも刺突文をねる。No.200 (J-15) 沈線が1条入る土器片を加工した土製円盤。No.201 (J-17) 隆帯のある土器片を加工した土製円盤。No.202 (K-8) 口縁部は庵文充填、脣部のアーチ状態垂文内は磨消、懸垂文間に繩文を施文後S字状沈線を施文。No.203 (K-8) キャリバー状深鉢の口縁部、羽状繩文を施文後アーチ状の沈線区画を施し区画内磨消。No.204 (K-21) 口縁部は隆帯による橢円区画、その中を円形刺突文と斜行沈線を交互に施文。No.205 (K-8) 口縁部の隆帯上に連鎖状の圧痕施文。No.206 (K-9) 波状口縁、膨らみをもった隆帯に刺突文を4個菱形に施文、頭~頸部は沈線を施文。No.207 (K-19) 口唇部は三角形を呈し粘土の貼り付けにより段落をもつ、頸部の隆帯には円形刺突列を施文。No.208 (K-20) 波状口縁、隆帯に沈線と刺突文を施し、突起部の刺突は穿孔している。No.209 (K-20) 波状口縁の突起部に3本の沈線を「川」の字状に施文、口唇部に沿って沈線を施文。No.210 (K-L-6・7) 口縁部は丸味をもちキャリバー状を呈す。全体に繩文を施文後アーチ状沈線により区画する。No.211 (K-21) 波状口縁突起部、突起部は穿孔、頭部に隆帯を巡らし突起部真下に刺突文を施す。No.212 (K-14) 脚部、半截竹管による平行沈線と刺突文。No.213 (L-5) 平行沈線による懸垂文内を磨消、他は6条単位の波状沈線文。No.214 (L-5) 口縁部は厚手で沈線を施す、隆帯による橢円区画内はLR繩文充填。No.215 (L-10) 波状口縁、無文、焼成前穿孔。No.216 (L-7) 口唇部は無文、三角形に隆起する懸垂文の区画内にアーチ状文を施文。地文は繩文。No.217 (L-5) 口縁に沿って隆帯を巡らし、隆帯の下に橢円区画を配し区画内は波状繩文に刻み目と斜行沈線を施文。口唇部は無文。内側も隆帯が一巡する。No.218 (L-19) 口縁に沿って沈線を巡らす。口唇部は折り返しが見ら

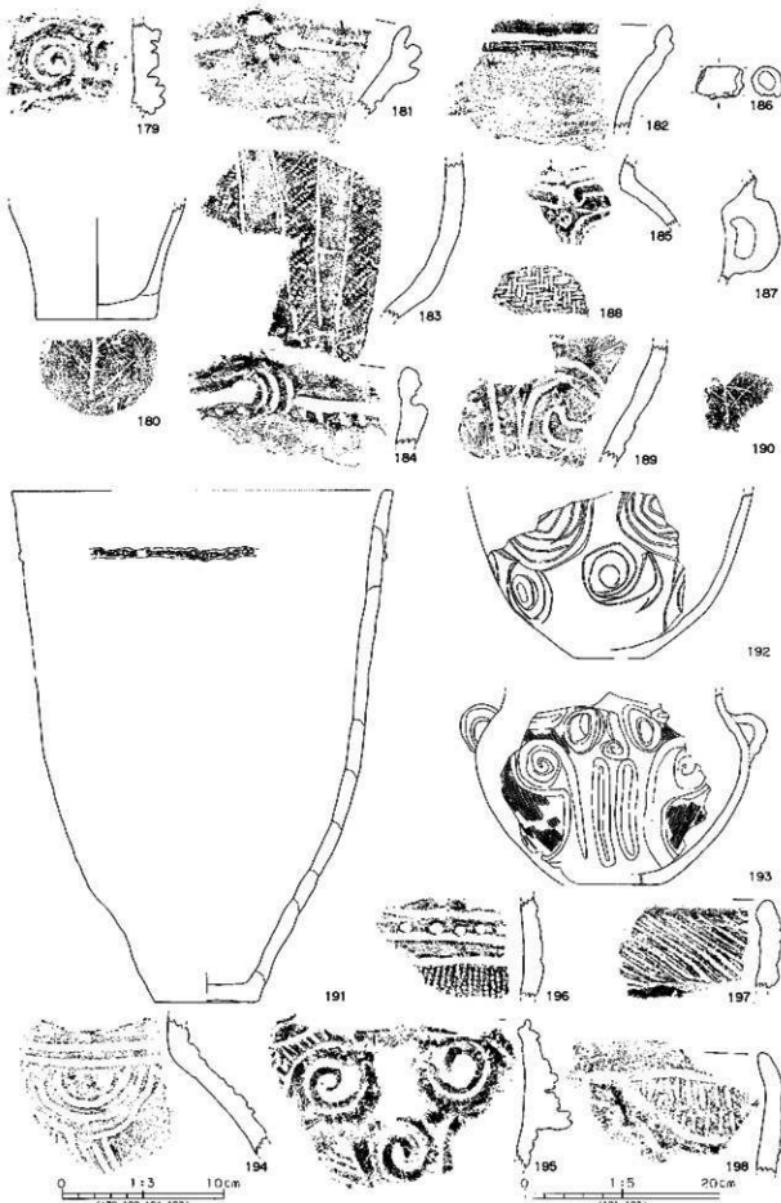
れ膨らみをもつ。無文。No.219 (L-5) 脊部に渦巻文、調部は地文に RL 繩文を施文。懸垂文は幅の広い沈線で区画し崩消。No.220 (L-5) 脊部、沈線で波状文と唐草文を施文。二次焼成度により文様不鮮明。No.221 (L-5) 隆帯に沿って沈線で横円区画し、区画方に斜行繩文を充填。No.222 (L-5) 波状条線文を施文後 S 字状沈線を施す。No.223 (L-6) 脊部に隆帯で区画し区画内に刺突文を施し脛部に櫛齒文を施文。No.224 (L-8) 厚手の口唇部は無文、地文の羽状繩文に竹管で幅広の沈線を施し、沈線間は膨らむ。No.225 (L-5) 底部まで地文の LR 繩文を施し U 字状沈線で 8 分割。No.226 (M-3) 沈線区画内に列点状刺尖文施文。No.227 (M-5) 波状口縁の口唇部は無文、地文の羽状繩文に竹管で幅広の沈線を施し、沈線間は膨らむ。No.228 (M-7) キャリバー状の口縁部は厚く、脣部に節状工具痕あり。No.229 (N-6) 半截竹管による平行沈線を縱と「ハ」の字状に施文。No.230 (O-9) 口縁に沿って 1 条の沈線を巡らし斜行繩文施文。No.231 (P-15) 底部、内外直丁字な撫。No.232 (Q-6) 口～頭部、横円区画内 RL 繩文を充填。横円区画線に沿って三角形の低い隆帯を作る。No.233 (Q-4) 平行沈線間を磨消、縄文充填部分に蛇行状の沈線施文。No.234 (Q-5) 頭部の隆帯面に刻み目を入れ、脣部には斜行繩文施文。No.235 (Q-15) 波状口縁の突起部に 4 本の沈線と刺突文を施す。右側も同様に施文されているものと思われる。口唇部に沿って沈線を横方向に施文。No.236 (Q-16) 小型鉢の底部、内外直丁字な撫。No.237 (R-15) 波状口縁の突起部に 3 本の沈線を外外面に施文。口唇部に出手状の沈線文。No.238 (R-4) 波状口縁で口唇部は無文、2 条の沈線間に約 1.0cm 間隔に列点文を施文、脣部は繩文施文。No.239 (R-10) 口縁に隆帯と渦巻文と沈線を施し区画立ちも沈線は 3 条の沈線を施文。No.240 (R-4) 口縁に沿って横に 1 条の細い沈線を巡らし、頭部には縱方向に沈線を施文。No.241 (R-7) 口縁部無文、薄付着、補修孔 1 穴。No.242 (S-7) 懸垂文開崩消、区画内は半截竹管による平行沈線文。No.243 (S-8) 地文は纏文、2 条の沈線により懸垂文を施し、その沈線間を磨消。No.244 (S-8) 口縁部に沈線を巡らし、その下部から脣部は LR 繩文を施文。No.245 (S-5) 口縁部に隆帯と沈線で横円区画を作り、区画内は沈線充填。No.246 (S-8) 厚手の口縁部から脣部を隆帯で区画し、区画内は沈線を縱に充填。No.247 (S-8) 厚手の脣部、地文は RL 繩文施文、懸垂文は隆帯と沈線で磨消。No.248 (T-9) 波状口縁の口唇部は三角形を呈す。隆帯による渦巻文と横円区画を施文、区画内は LR 繩文充填。No.249 (T-9) 口～頭部、平行沈線間に弧状沈線を施し輪状を呈す。No.250 (T-12) キャリバー状の口縁部は隆帯による渦巻文と横円区画を構成する、区画内は RL 繩文施文。No.251 (T-13) 隆帯による渦巻文と彌文を構成、区画内は半截竹管による斜行沈線。No.252 (V-11) 地文の繩文に頭部は横方向の隆帯文、調部は沈線区画内を磨消。No.253 (V-8) 脊部、櫛状工具による条線文を全体に施し懸垂文と S 字状文を施文、沈線間は弱い磨消。No.254 (X-8・9) 底部、内面は指頭凹痕が明顯、土器の製作が良くわかる。No.255 (W-8) 波状口縁、隆帯で渦巻文と横円区画を構成する。No.256 (一括) 内外面から穿孔製作途中、無文。No.257 (一括) 口縁部の飾り突起部、沈線と穿孔と刺突文。No.258 (一括) 口～脣部、隆帯による渦巻文と懸垂文、区画内は箆状工具による沈線文。

2 石材の分布状況

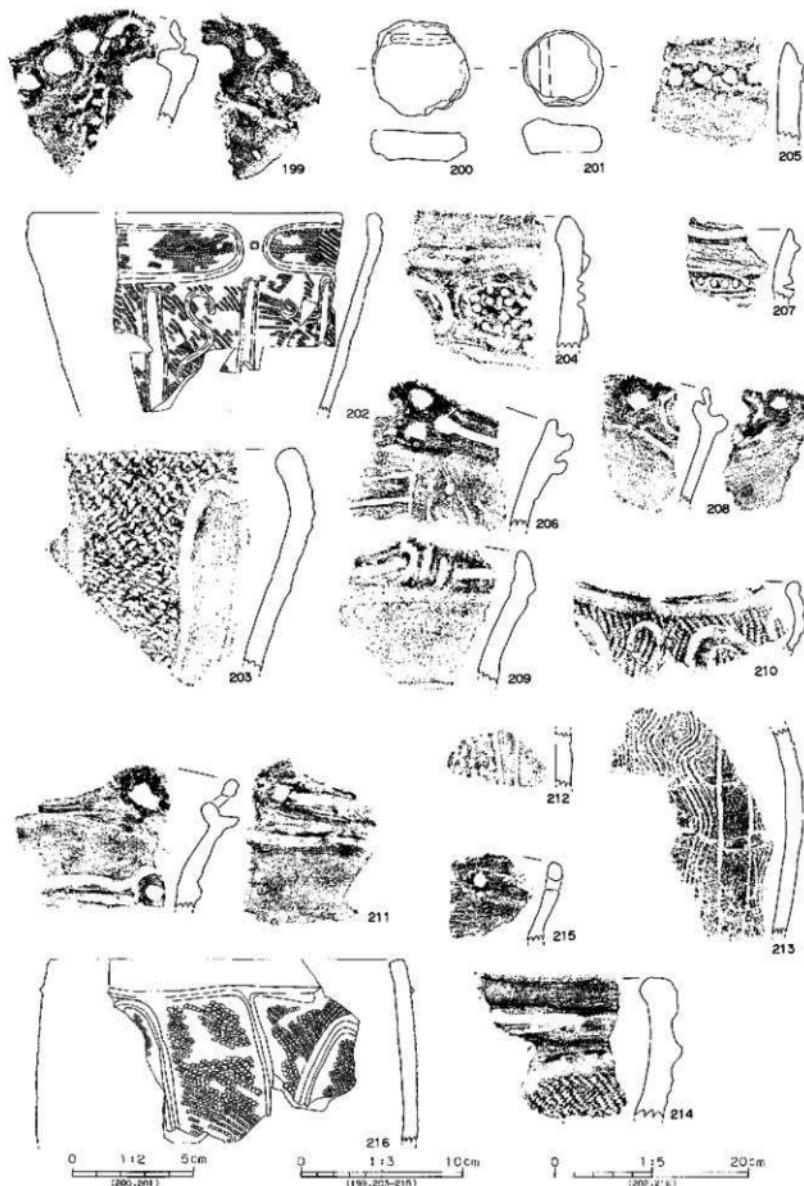
通 構 別	個 数	A…J/Z × 100	黒曜石	チャート	頁 石	石 英
A 配石 1	11	4.1	10	1		
B 配石 2	58	21.8	55	2	1	
C 配石 3	55	20.6	46	4	5	
D 配石 4	25	9.3	16	6	3	
E 集石 1	7	2.6	6	1		
F 集石 2	0					
G 集石 3	9					
H 遺物散布密集	28	10.5	24	2	2	
I A～II	184	69.1	157	16	11	
J 無遺機	84	30.8	66	9	7	2
Z 基礎石等総数	268		223	25	18	2
			83.2%	9.3%	6.7%	0.8%

第 1 表 遺構別黒曜石・石材の分布状況表

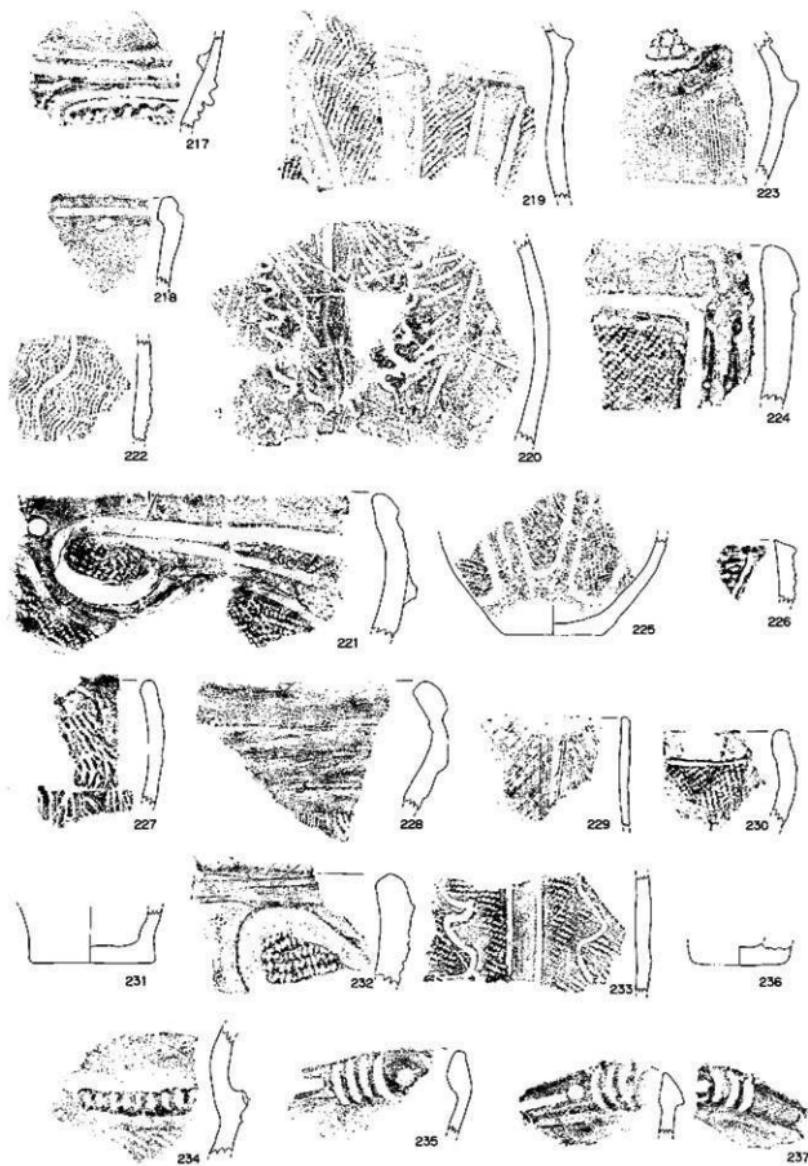
黒曜石等の分布は遺構別黒曜石・石材の分布状況表に見られる通り各遺構所在地と一致した分布を示している。黒曜石・石材の総数は 268 個で、遺構所在地に分布する数は 184 個総数の 69% に当たる。この内配石 2 から 58 個、配石 3 と散石住戸から 55 個で 3 遺構地で 113 個となり、総数の 42% を占める状況になっている。石懸頬の石材割合は、黒曜石 83.2%、チャート 9.3%、その他の岩石類 7.5% である。



第28図 繩文土器1 (E~Jグリッド)

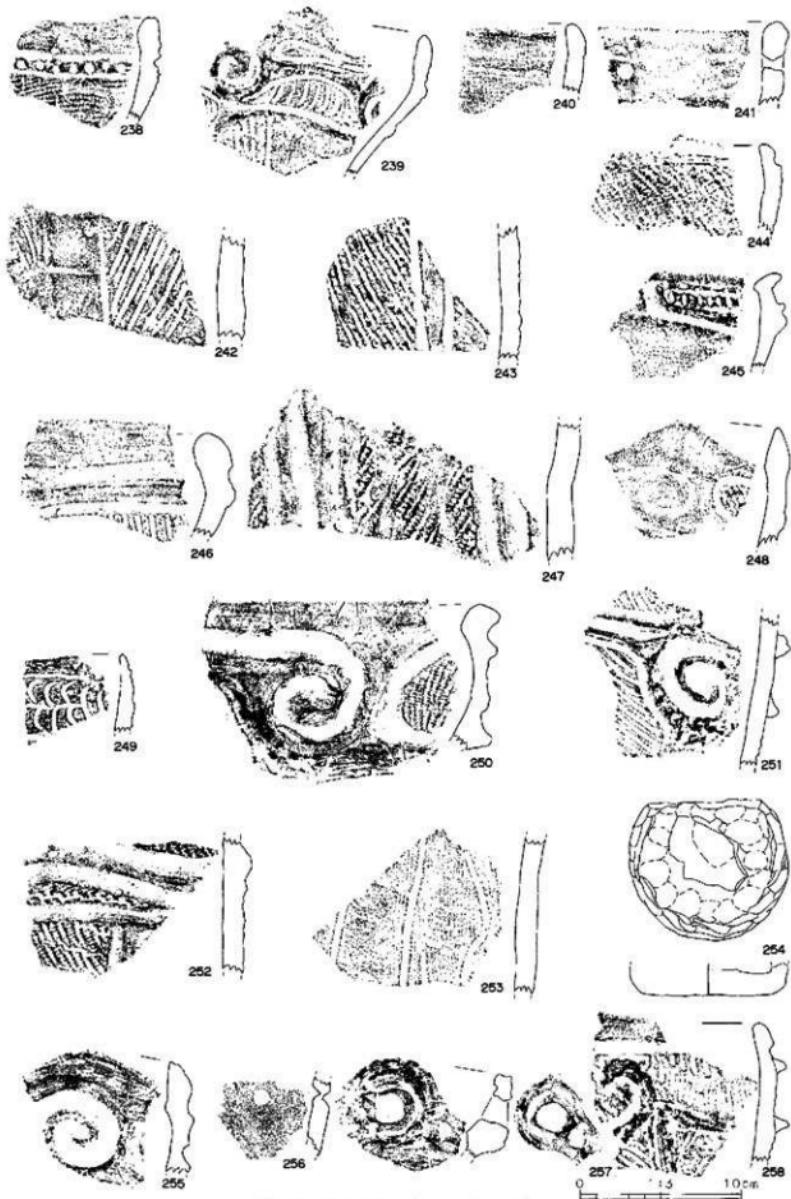


第29図 繩文土器2 (J~Lグリッド)



第30図 縄文土器 3 (L ~ R グリッド)

0 1:5 10cm



第31図 繩文土器4 (R～Xグリッド)

3 石器 (第32~38図)

石鎚類 (第32図、図版8)

No.259 (E-20) 凹基無茎鐵黒曜石0.72 g 基部の一部と先端欠損。No.260 (E-21) 凹基無茎鐵黒曜石0.37 g 左基部欠損。No.261 (F-19) 平基無茎鐵黒曜石0.38 g 基部欠損。No.262 (F-20) 凹基無茎鐵黒曜石0.55 g 完形。No.263 (H-8) 凹基無茎鐵黒曜石0.91 g 完形。No.264 (H-9) 凹基無茎鐵チャート4.67 g 先端欠損。No.265 (H-16) 凹基無茎鐵黒曜石0.42 g 完形。No.266 (H-19) 凹基無茎鐵黒曜石0.37 g 基部欠損。No.267 (I-10) 凹基無茎鐵黒曜石0.35 g 完形。No.268 (I-10) 石鎚黒曜石0.34 g 基部欠損。No.269 (J-10) 凹基無茎鐵黒曜石0.85 g。No.270 (J-17) 黒色頁岩2.67 g 未完成品。No.271 (J-19) 石鎚黒曜石0.66 g 基部欠損。No.272 (K-19) 凹基無茎鐵黒曜石0.68 g 先端部欠損。No.273 (M-4) 凹基無茎鐵黒曜石0.53 g 完形。No.274 (N-4) 凹基無茎鐵黒曜石0.32 g 左基部欠損。No.275 (N-5) 凹基無茎鐵黑色頁岩1.12 g 完形。No.276 (N-10) 凹基無茎鐵黒曜石0.41 g 右基部欠損。No.277 (P-10) 石槍 黑色頁岩5.23 g 未完成品。No.278 (Q-7) 凹基無茎鐵黒曜石0.87 g 左基部欠損。No.279 (R-12) 凹基無茎鐵黒曜石0.35 g 左基部欠損。No.280 (一括) 石鎚 赤色チャート2.19 g 未完成品。No.281 (一括) 平基無茎鐵チャート1.46 g 完形。

生活用具 (第32図、図版8)

No.282 (M-5) 石匙 頁岩7.11 g 完形。No.283 (N-5) 撥器 頁岩18.14 g。No.284 (敷石住居) 撥器 原石チャート120.0 g。No.285 (I-13-15) 撥器 原石チャート40.69 g 赤色痕。No.286 (L-9) 撥器 輝石安山岩200 g 未完成品。No.287 (一括) 撥器 泥岩90 g。No.288 (堅穴住居) 石皿 朝石山産輝石安山岩の剥離面をそのまま利用790 g。No.289 (堅穴住居) 石皿 緑泥片岩2,430 g。No.290 (M-4) 石皿 朝石山産輝石安山岩2,970 g 1/2以下残。

祭祀用 丸石 (第33図、図版9)

No.291 (敷石住居) 角閃安山岩260 g。No.292 (敷石住居) 輝石角閃安山岩6,500 g。No.293 (敷石住居) 角閃安山岩1,060 g 火受け割れ目 煤付着。No.294 (2号右旋炉) 角閃安山岩11,500 g 割れ目。No.295 (3号左坑) 安山岩280 g 火受け割れ目 裏頭欠落。No.296 (E-17) 角閃安山岩8,100 g やや楕円形。No.297 (E-20) 輝石角閃安山岩430 g。No.298 (G-14) 角閃安山岩420 g 平らな面あり。No.299 (H-20) 輝石安山岩240 g 1/2以上欠損 火受け割れ目。No.300 (I-9) 角閃安山岩5,300 g。No.301 (M-10) 角閃安山岩100 g。No.302 (N-5) 輝石安山岩100 g 番紅色塗彩。No.303 (N-8) 角閃安山岩33,600 g。No.304 (S-12) 輝石安山岩710 g 火受け割れ目。No.305 (S-12) 角閃安山岩580 g 火受け片面凹凸あり。

他に丸石は4点が検出されている。4,900 g、9,000 g、13,500 g、20,100 g各1個。

石棒 (第33~34図、図版9)

No.306 (D-21) 角閃安山岩130 g 先端部敲打 火受け割れ目。No.307 (D-22) 輝石角閃安山岩5,500 g 火受け剝離。No.308 (F-19) 緑泥片岩40 g 研磨 基部欠損。No.309 (F-21) 角閃安山岩15,200 g 先端部欠損 火受け割れ目。No.310 (G-12) 角閃安山岩1,030 g 研磨 火受け割れ目 煤付着。No.311 (G-19) 角閃安山岩15,900 g 断面の位置に凹1穴 煤付着。No.312 (H-19) 角閃安山岩320 g 剥離痕 凹1穴。No.313 (I-18) 緑泥片岩260 g 破片。No.314 (I-20) 角閃安山岩8,100 g 河岸敲打痕 凹14穴。No.315 (K-12) 角閃安山岩18,500 g 凹4穴。No.316 (M-4) 角閃安山岩5,300 g 先端欠損 火受け割れ目 立石。No.317 (M-6) 石英粗面岩960 g 研磨。No.318 (M-9) 朝石山産の輝石角閃安山岩1,200 g 研磨火受け煤付着 先端欠損。No.319 (N-3) 角閃安山岩3,500 g両端敲打痕。No.320 (N-5) 輝石角閃安山岩120 g 全面研磨 火受け割れ目。No.321 (O-6) 石英斑岩2,500 g 先端部剝離合せ 研磨 赤色塗彩。No.322 (Q-10) 角閃安山岩5,000 g 火受け割れ目、4条の赤色塗彩痕。No.323 (Q-10) 角閃安山岩120 g 先端火受け割れ目 暗赤褐色塗彩。No.324 (一括) 緑泥片岩440 g 表面研磨 基面割れ面。

生活用具 (第35~37図、図版9~10)

No.325 (堅穴住居) 敲・磨石 複輝石安山岩870 g 楕円形 火受け割れ目。No.326 (敷石住居) 敲・磨・凹石 角閃安山岩550 g。No.327 (敷石住居) 敲・凹石 複輝石安山岩420 g 火受け割れ目。No.328 (敷石住居) 敲・磨・凹石 角閃安山岩550 g 火受け割れ目。No.329 (E-20) 多孔石(93穴) 研磨 角閃安山岩9,900 g。No.330 (G-12) 敲・磨・凹石 複輝石安山岩470 g。No.331 (G-13) 凹石 複輝石安山岩820 g 表面粗 褐面磨。No.332 (G-20) 敲・磨・凹石 輝石角閃安山岩450 g 研磨。No.333 (II-9) 多孔石(7穴) 角閃安山岩75,100 g 火受け割れ目剝離痕。No.334 (H-13) 敲・磨・凹石 角閃安山岩940 g 割れ目。No.335 (H-17) 敲・磨・凹石 角

閃安山岩380 g。No.336 (II-19) 敵・磨・凹石 角閃安山岩240 g。No.337 (H-19) 小石棒 斧石角閃安山岩90 g 全面研磨。No.338 (I-9) 敵・凹石 角閃安山岩380 g。No.339 (I-15) 敵・磨・凹石 角閃安山岩780 g。No.340 (I-19) 敵・凹石 角閃安山岩300 g。No.341 (J-10) 凹石 複輝石安山岩380 g。No.342 (J-17) 凹石 複輝石安山岩400 g。No.343 (K-13) 敵・磨石 角閃安山岩380 g 研磨。No.344 (K-19) 凹石 複輝石安山岩 浅開山火山彈270 g。No.345 (K-20) 敵・凹石 輝石角閃安山岩640 g 火受け割れ目。No.346 (L-5) 敵・磨・凹石 角閃安山岩360 g 割れ目。No.347 (L-5) 敵・凹石 輝石角閃安山岩460 g。No.348 (L-7) 敵・凹石 複輝石安山岩470 g。No.349 (L-8) 多孔石 (19穴) 角閃安山岩4,000 g 研磨。No.350 (M-4) 敌・磨・凹石 輝石角閃安山岩510 g。No.351 (M-6) 敌・磨・凹石 輝石角閃安山岩250 g。No.352 (M-6) 敌・磨・凹石 角閃安山岩 630 g。No.353 (M-9) 敌・磨石 角閃安山岩980 g。No.354 (M-13) 敌・磨・凹石 角閃安山岩570 g。No.355 (M-18) 敌・磨・凹石 (4穴) 石英角閃安山岩820 g。No.356 (N-4) 敌・磨・凹石 石英角閃安山岩460 g。No.357 (N-8) 敌・磨・凹石 角閃安山岩280 g。No.358 (O-4) 磨・凹石 角閃安山岩310 g。No.359 (O-7) 敌・磨・凹石 複輝石安山岩700 g。No.360 (O-9) 多孔石 (64穴) 角閃安山岩2,500 g 全面蜂の巣状。No.361 (P-6) 敌・磨・凹石 複輝石安山岩660 g 火受け割れ目。No.362 (P-10) 多孔石 (33穴) 角閃安山岩25,400 g。No.363 (P-11) 敌・凹石 複輝石安山岩600 g。No.364 (P-14) 敌・凹石 複輝石安山岩710 g。No.365 (R-10) 敌・磨・凹石 角閃安山岩580 g。No.366 (R-12) 磨・凹石 角閃安山岩640 g 割れ目。No.367 (R-14) 敌・凹石 複輝石安山岩640 g。No.368 (S-14) 敌石 角閃安山岩130 g 研磨 小石棒。No.369 (T-9) 敌・凹石 複輝石安山岩320 g。No.370 (T-10) 鞍石 輝石角閃安山岩370 g。

石斧類 (第37・38図、図版10)

No.371 (F-13) 斧製 斧碌岩220 g 片面光沢。No.372 (O-13) 磨製 蛇紋岩26.23 g両面研磨。No.373 (敷石住居) 捱形打製 輝石安山岩50 g 磨耗痕。No.374 (敷石住居) 捱形打製 粘板岩80 g 磨耗痕。No.375 (敷石住居) 捱形打製 角閃安山岩100 g。No.376 (敷石生居) 短冊打製 粘板岩140 g 刃部先端に磨耗痕。No.377 (3号土坑) 分割形 角閃安山岩80 g 両端欠損。No.378 (D-20) 捱形打製 裂泥石片岩140 g 局部磨耗。No.379 (F-21) 打製 粘板岩 40 g 磨耗痕。No.380 (G-10) 短冊打製 粘板岩130 g 磨耗痕。No.381 (G-20) 短冊打製 粘板岩90 g。No.382 (1号集石) 泥漿打製 黒色頁岩50 g。No.383 (H-20) 捱形打製 輝石安山岩120 g 刃部欠損 磨耗痕。No.384 (I-15) 捱形打製 角閃安山岩150 g 刃部磨耗。No.385 (I-18) 短冊打製 輝綠岩90 g。No.386 (I-20) 短冊打製 角閃安山岩90 g 基部欠損。No.387 (I-20) 短冊打製 角閃安山岩110 g 両面磨耗両端欠損。No.388 (L-19) 短冊打製 黑色頁岩40 g。No.389 (G-18) 打製 石英輝綠岩160 g 自然面を残す。No.390 (J-10) 角閃安山岩200 g 三角形の自然石 角が磨耗。No.391 (N-5) 短冊打製 角閃安山岩140 g 板状の白然石 優かに加工 磨耗痕著。No.392 (M-4) 捱形打製 角閃安山岩160 g 優かに磨耗痕。No.393 (M-4) 捱形打製 黑色頁岩80 g 刃部や刃耗。No.394 (M-4) 捱形打製 黑色頁岩100 g。No.395 (M-5) 短冊打製 角閃安山岩80 g 先端部優かに磨耗痕両面自然面。No.396 (N-6) 短冊打製 輝石角閃安山岩120 g 刃部欠損。No.397 (N-7) 短冊打製 角閃安山岩80 g 基部欠損。No.398 (N-7) 短冊打製 角閃安山岩80 g 基部欠損 刃部磨耗。No.399 (O-4) 短冊打製 黑色頁岩90 g 刃部磨耗。No.400 (O-9) 分割形打製 角閃安山岩220 g 片面と括れに磨耗痕。No.401 (P-6) 分割形打製 角閃安山岩200 g 粗製。No.402 (P-12) 捱形打製 輝石角閃安山岩105 g 磨耗痕著。No.403 (R-14) 短冊打製 緑泥片岩60 g。No.404 (S-14) 分割形打製 粘板岩220 g 1/2欠損。No.405 (一括) 短冊打製 黑色頁岩50 g 磨耗痕。No.406 (O-15) 打製 輝石安山岩80 g 未完成品。

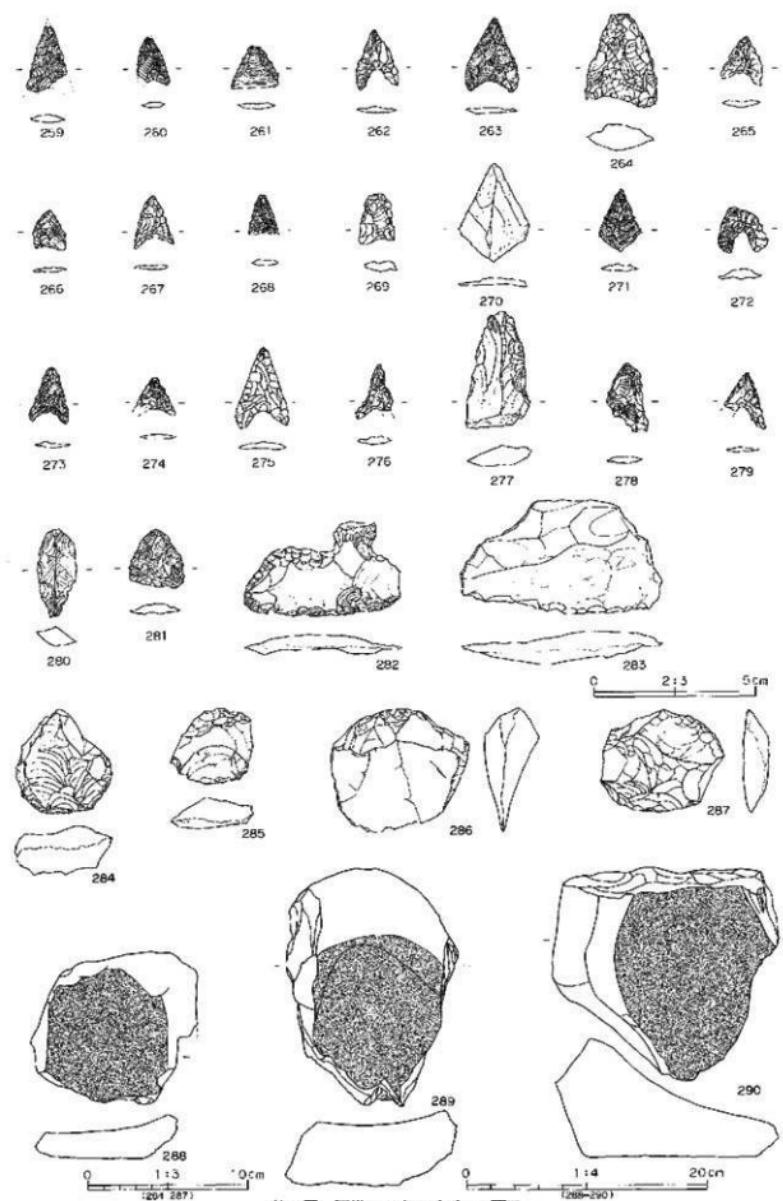
磨石 (第38図、図版10)

No.407 (5号上坑) 角閃安山岩150 g 全体に研磨 煤付着。No.408 (J-9) 角閃安山岩220 g 剥落。No.409 (J-11) 角閃安山岩620 g。No.410 (K-19) 角閃安山岩300 g 小窓孔。No.411 (L-7) 角閃安山岩490 g 剥離面が顕著 完成。No.412 (G-12) 輝石安山岩 石鍤25.92 g 長方形に研磨。No.413 (E-21) 岩版の可能性あり300 g 上端欠損全面研磨 火受け煤付着。No.414 (K-18) 白色凝灰岩 祭祀用呪術遺物10.9 g。

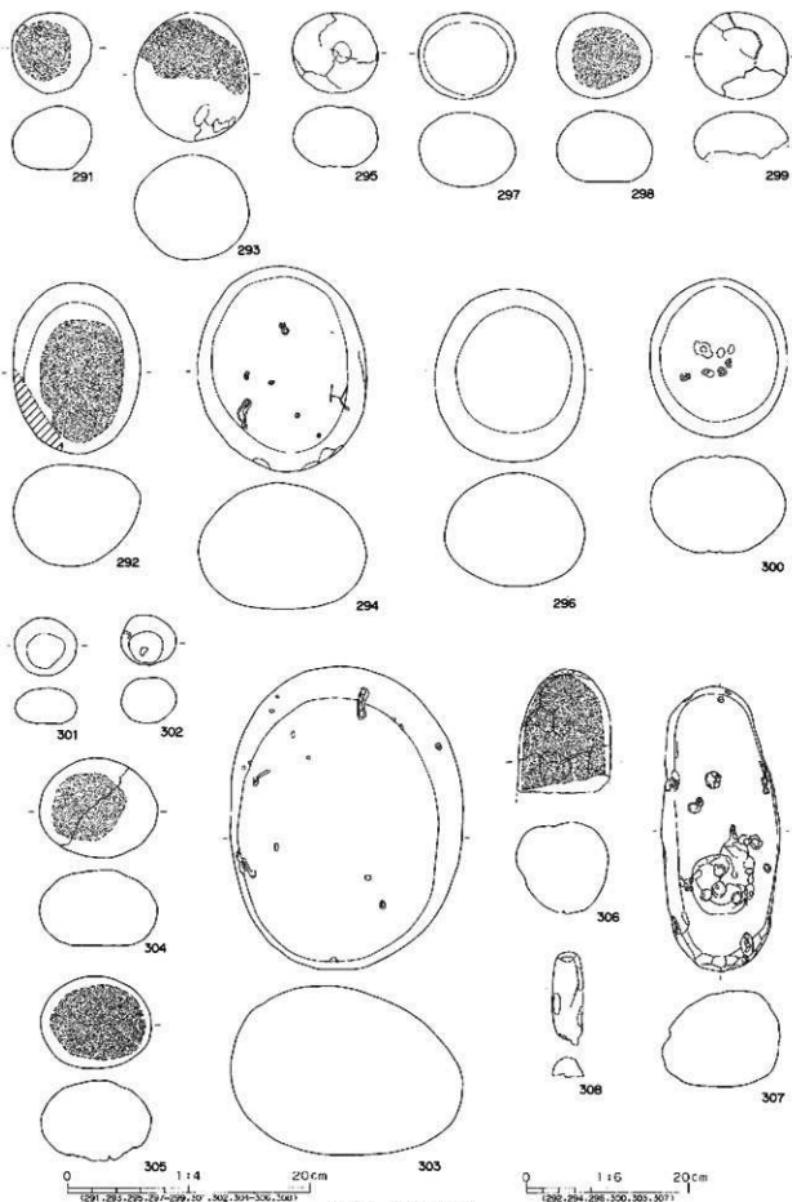
写真を掲載した遺物 (図版10)

No.415～No.417 (敷石住居) 朱着色土器。No.418 (敷石住居) 補修孔。No.419 (N-3) 朱着色土器。No.420 (P-10) 小型糞把手。No.421 (X-8) 朱着色土器。No.422 (N-6) 黒曜石7.35 g。No.423 (縁3) 黒曜石約片6.23 g。No.424 (I-9) 赤色チャート70.34 g。(No.425 (F-14) 260 g。No.426 (H-10) 緑泥片岩20 g。No.427 (M-3) 60 g.)

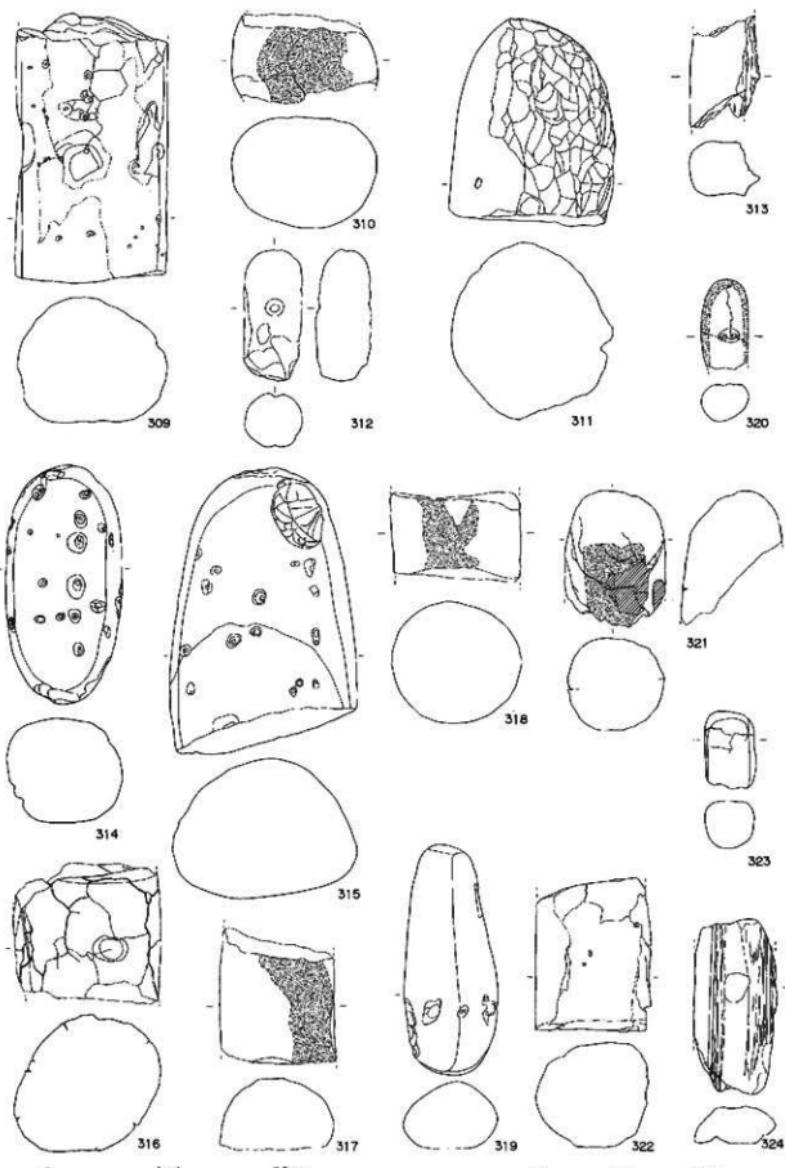
以上162点の石器について観察の結果、本遺跡では打製石斧の磨耗痕が顕著なこと。石鎌は完形品が少ない。



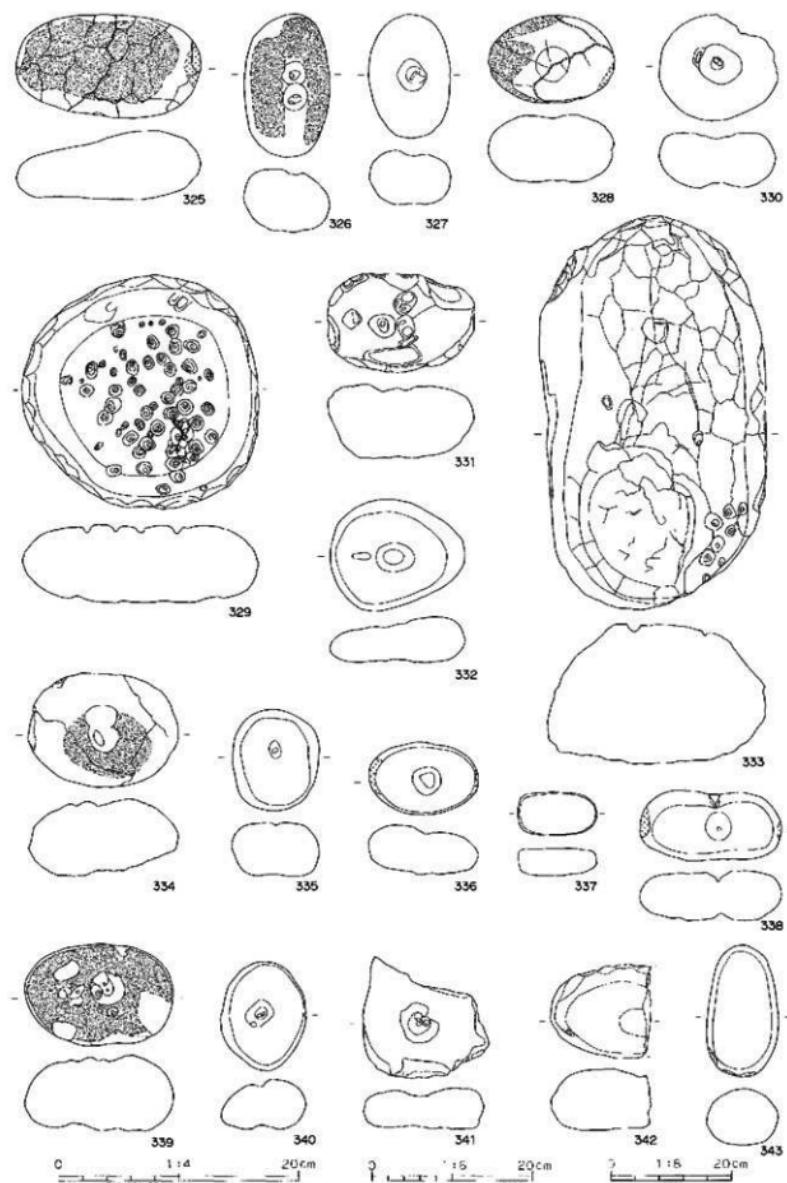
第32図 石鎌・スクレイパー・石皿



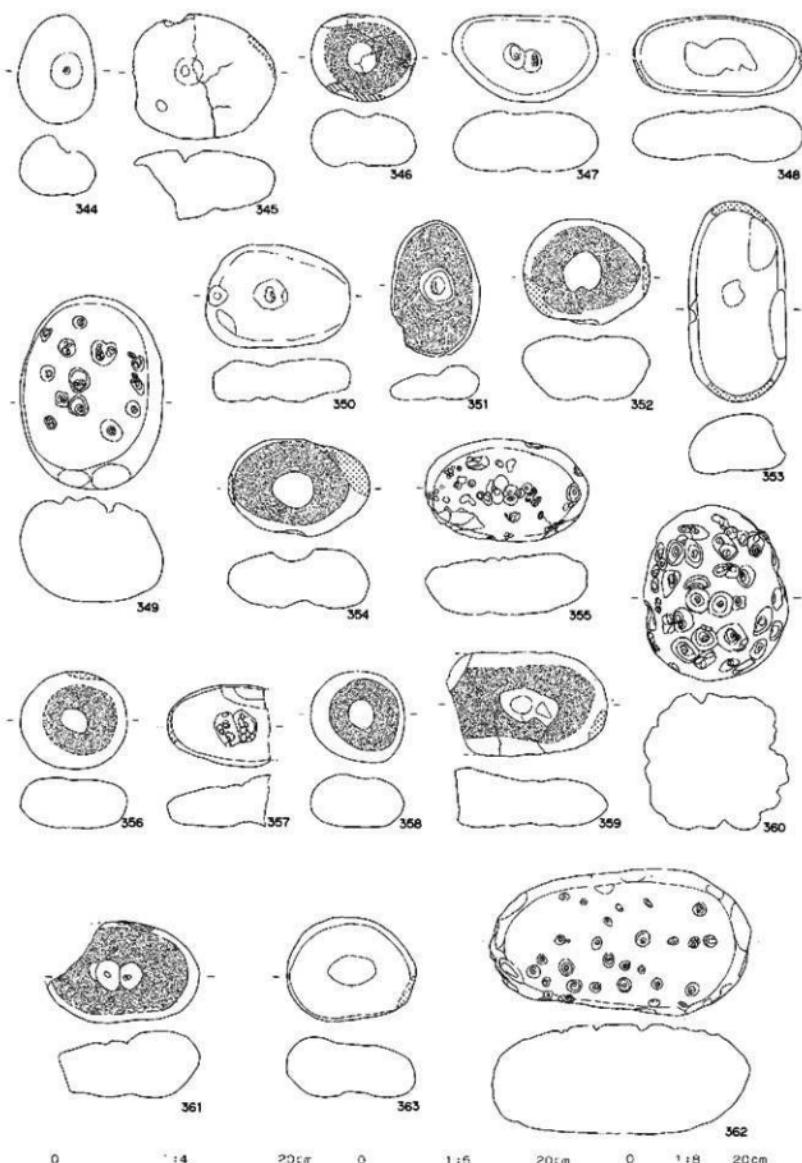
第33図 丸石・石棒



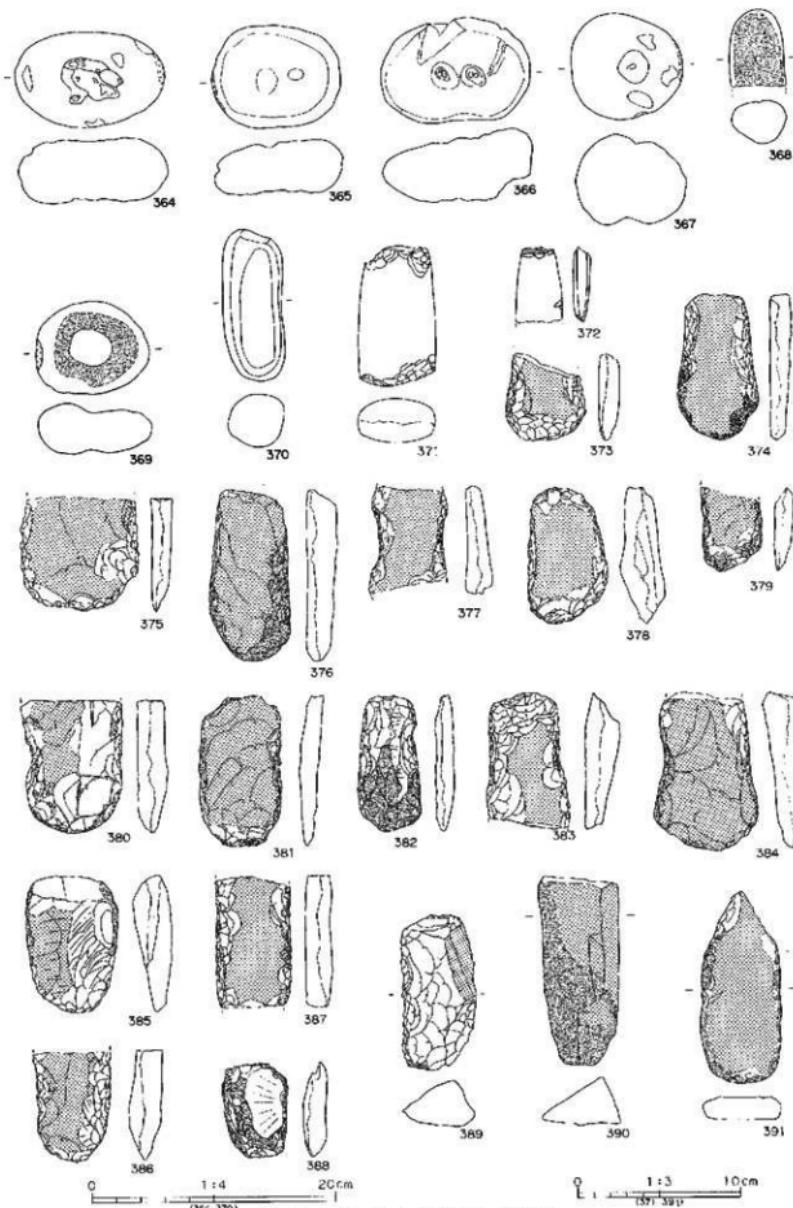
第34図 石棒



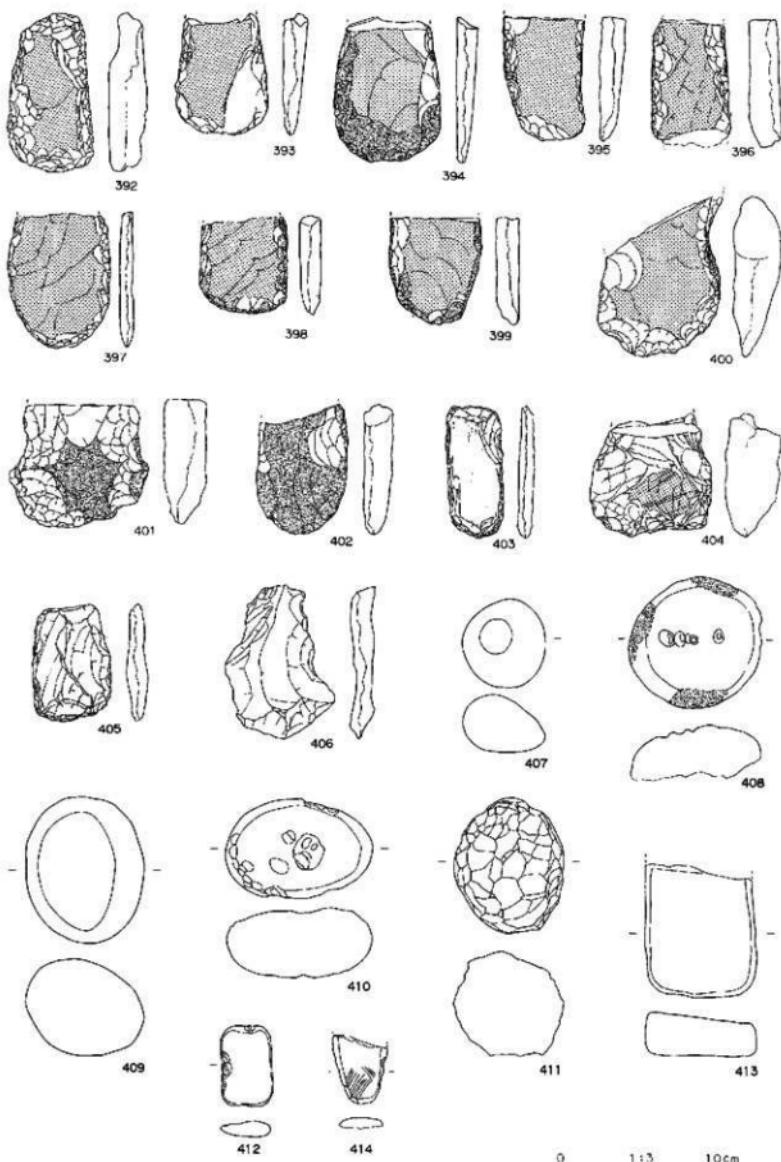
第35図 凹石・多孔石・散石・磨石1



第36図 凹石・多孔石・敲石・磨石2



第37圖 凹石・磨石・磨製石斧・打製石斧



第38圖 打製石斧・磨石

No316の様に火受けをしている石器（石棒・凹石・磨石・敲石）が崩落したりひび割れているものが目立つ。これら火受けした石器や未完成品の石器は配石遺構の中で呪術的な用途に使用されたと想像される。

4 検出遺物

実測図、拓本及び写真で上器と石器430点を掲載した。その他の縄文土器12,304点、縄文時代以外の土器等が7点、破損した石器や未完成の石器・剣片が234点検出された。

今回の発掘調査では縄文時代中期前葉（勝坂式）から後葉後葉（安行式）にかけての多量の土器及び石器類が検出された。これらの主体的遺物は中期後葉の加曾利E II式土器と後前期葉の堀之内式土器である。なお本遺跡出土縄文土器については縄文土器人観1～4の分類方法を参考にした。

第1群 中期前葉（勝坂式土器群）

口縁部は波状を呈し、隆帯上に刻み目が入る。隆帯盃に沈線を多重に沿わせ、曲隆線が文様の根幹に据えられ、文様の隙間にには条線が施文された土器。遺物No1・2・3。口縁部は三角形に膨らみ頸部は「く」の字状を呈し表面に絞杉文、脇部は直角に網文施文。遺物No5。

第2群 中期後葉①（加曾利E II式土器群）

口縁部文様帯は茎線によるS字状文の変形した渦巻文、頸部の無文帯の旁邊が標識となる。胴部は隆線及び沈線による平行状の懸垂文を施文する、文様帯が3段に区分される。遺物No24・86・89・97・144・245・247。

第3群 中期後葉②（加曾利E III式土器群）

頸部無文帯を喪失し、区画化された口縁部文様帯と脇部に磨消絞文帯を持つ、①磨消渦文帯が殆ど見られない、遺物No7・13・16・21・22・63・1～4・64・65・66・69・148・210・214・221。②磨消纏文帯が標識になる、遺物No9・10・11・12・14・15・17・18・19・34・51・56・58・67・68・81・93・172・174・202・219・224・233・243・248・250・252・255。③磨消纏文帯を構成する懸垂文が上部で逆「U」字状に接続する、遺物No35・36・37・55・175・203・225。④口縁部は直線的に開き微隆起帯による横凸区画内と頸・胴下半部に縦絞文施文、遺物No43・160・213・222・227。⑤浅鉢土器、遺物No20・32・39・40・41・87。

第4群 中期終末（加曾利E IV式土器群）

口縁部文様帯を喪失し、脇部文様が口縁部までせり上がり、磨消纏文帯が発達する。遺物No27・38・88・98・99・176・177・183・230・244・253。微隆起線文施文土器、遺物No4・8・44・95・96・149・156・216・232。口縁のやや下がった所に1矢の隆帯を施し、その上に押圧を伴うもの、遺物No155・163・191・205。口縁部欠損全体に纏文を施文し底部を丁寧に磨き赤色塗彩、遺物No176。浅鉢土器、遺物No143・173・193。

第5群 中期中葉から終末（曾利式系の影響を受けた土器群）

口縁部の下に活れた粘土紐の波状文や顔目文がある、遺物No47。口縁部の条線が斜方向又は直角に描かれる、遺物No72・197。横円区画に沈線文、遺物No25・26・246。口縁部無文、キャリパー形を呈する脇部の縦位条線が僅かに見られる、遺物No228。地文に糸縄文、隆帯による渦巻文・脇部は連続渦巻文、遺物No31・251。口縁・脇部に横円区画を竹管状工具で施文し、区画内に沈線施文、遺物No28・71・150・198。脇部は縦の降線によって長方形に区切られその中央部に渦巻文を施文後棒状工具により条線施文、口・頸部に横円区画文、脇部の括れがなくなる、遺物No171。平行沈線間は無文、櫛状工具による細かい櫛描文の間に波状沈線施文、その間に藤手状の渦巻文と沈線を4単位に施文、遺物No112。長方形の沈線区画内に「ハ」の字状に施文、遺物No229。隆帯による懸垂文、区画内は矢羽根状に沈線施文、遺物No242。口縁部連続区画文、脇部は隆帯による懸垂文、粘土紐の貼付、遺物No29。半円連続区画文、波状口縁区画内条線施文、遺物No30。口縁部に沈線を横走させたあと懸垂文・曲線文施文により口縁部の沈線は消える、遺物No70。長方形の沈線区画内に「ハ」の字状文、地文は纏文、遺物No91。

第6群 中期中葉から後葉（唐草文系の影響を受けた土器群）

隆帯と沈線による渦巻状の唐草文様と櫛齒状T工具による条線文に象徴される、遺物No23・45・164・179・195・204・217・220・223・239・249・258。

第7群 後期初頭（称名寺式系の土器群）

J字状文が纏文帯で表されるもの、包み込まれるもの、細かな纏文と細い沈線によるJ字文・反転文様、遺物No57・60・100・103・104・185。沈線（單一・並行）と刺突文（円形・斜）列点文（兩垂文）施文土器、遺物No79・90・136・139・154・189・207・212・226。口縁の尖端部、遺物No111・114・116・162。横走りする沈線で区画、纏文帯と無文帯の組み合わせ、遺物No101・102・153。

第8群 後期前葉①（堀之内Ⅰ式系の土器群）

口唇部に沈線をもち直線的に立ち上がる深鉢形土器。頸部に強い括れをもつ深鉢には頸部を区画するものとしないものに2分される、遺物No48・74・80・107・110・128・129・130・158・161・166・182・218。波状口縁突出部に「川」の字状の沈線文施文、遺物No75・117・126・184・209・235・237。口唇部沈線軸突文吊手状「川」の字状沈線、遺物No73。1点の刺突文と吊手状文、胴部は沈線文、遺物No125・132。2条の沈線、吊手状文、胴部に半円形の沈線、遺物No122・124・194。口唇部と胴部に沈線文、2個の刺突文と吊手状文、遺物No181・206。口縁部は内傾し口唇部に沈線を施文、その下に刺突文を一列施文、遺物No108、更にその下に沈線を施し回ったもの、遺物No78。逆「の」の字状刺突文と口唇部沈線文、遺物No134・135。口唇部沈線と穿丸、刺突文、遺物No113。胴部の把手は吊手状を呈し沈線と刺突文を施文、遺物No187。全体薙巻き、把手両端はボタン状貼付、小壓蓋、遺物No54。

第8群 後期前葉②（堀之内Ⅱ式系の土器群）

口縁部が外反するアサガオ形の深鉢が主体で腹部がやや括れる、頸部の強く括れる鉢も引き続き作られる。充満繩文が盛行し幾何学文、渦巻文が施される。アサガオ形深鉢には刻みのある隆線が口縁部に貼り付けられる事が多く3~4単位の「8」の字形の貼付文が特徴である。一ヶ所だけ波底部を設けたり一つの把手を強調する。土器の正面を意識した例も多く、口唇部を内崩するのが特徴である。

口唇部を内崩す、遺物No33・109・131。「8」の字文、遺物No151・167。アサガオ形の深鉢、充満繩文が盛行し刻みのある隆線が見られる、遺物No234。細い沈線で渦巻文施文、遺物No192。口唇部に沈線、吊手状の垂下文に刻み目がはいる、把手の一ヶ所を強調し正面を意識する、遺物No77・118・121・123・127・138・141・142・199・208・211。口唇部突起（一ヶ所だけ強調したものと考える）、遺物No52・115・119・120・257。注口十唇の注口部、遺物No186。

第8群 後期前葉③（三十九場式系の影響を受けた土器群）

櫛齒状工具により条線文、細かく浅い沈線の集合、遺物No6。胴部全面に刺突文が施される深鉢、遺物No46。器形は安行Ⅱ式に類似するが条線文がなく全面的に磨消、繩文模のみの粗製土器、遺物No133。

第9群 後期中葉①（加曾利BⅠ式系の土器群）

口縁部内側に竜状の張り出しを持つ、底部分に刺突文が加えられる、遺物No105・106。並行沈線に左下がりの区切り文を挖つ波状口縁深鉢、砲弾型の器形、遺物No240。2条の沈線で区画された格子目の文様を挖つ粗製深鉢形土器、羽状の沈線、遺物No50・53・157。

第9群 後期中葉②（加曾利BⅡ式系の土器群）

深鉢形土器、突起は左右対称、体部の文様は向かい合い横走りする連弧文と縱長の対弧文、遺物No76。波状口縁の並行沈線内に円形刺突文を施し体部は繩文を施文（高井東式一段階）、遺物No137・196・238。

第10群 後期後葉（安行式系土器群）

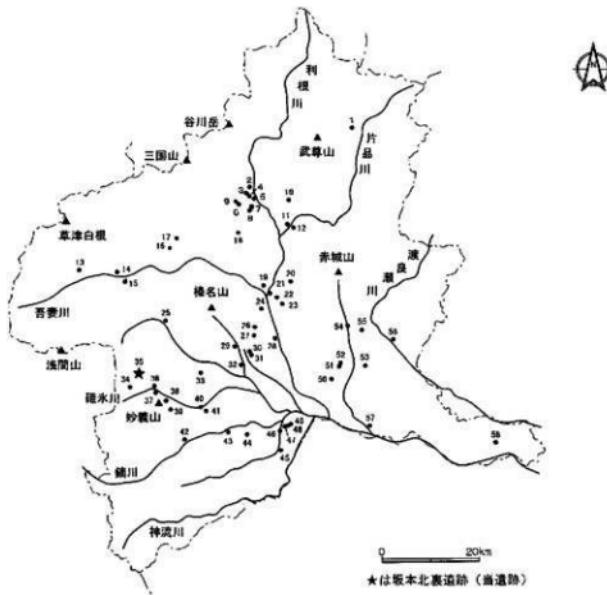
口縁部に降起帯を持ち、降起帯に繩文施文、遺物No94・152。腹部に半截竹管により羽状沈線施文、遺物No42。平行沈線で区画し内部に糸状沈線を横に並べ鱗状を呈す、遺物No249。

掲載した石器類は石鏃23点、石匙2点、搔器4点、石皿3点、丸石15点、石棒19点、凹石及び多孔石と敲石、磨石を兼用するもの46点、蛤刀型磨製石斧2点、打製石斧33点、磨石4点、その他の石剣5点が検出された。楔形石斧5点、分銅形石斧2点、短冊形石斧33点であった。そのうち打製石斧は40点中19点が51~100g、この重さのものが使用頻度が高かったことを示している。

木遺跡で検出された凹石・敲石・磨石・石皿・丸石についてその特徴を記述する。

凹石・敲石・磨石は遺物No325~370までの46点中検出のものの40点、敲打痕のあるもの34点、研磨痕のあるもの26点である。それらを使用目的別に分けると、窓み1穴のもの3点、片面2穴のもの3点、表面に1穴のもの11点、3穴→5点、4穴→5点、6穴→2点、7穴→2点、これ以上のものは19穴、33穴、63穴、93穴の4点が検出された。生活用具としての凹石が他の目的にも使用されている。その兼用割合は3目的（凹・敲・磨→19点）、2目的（凹・敲→11点）（凹・磨・3点）（敲・磨→2点）、1目的だけのもの（凹→8点）（敲→2点）（磨→1点）とその差がはっきりしている。まず持ち込まれた石は凹石として使用し、それらの中で敲石として兼用し、更に使用可能なもののが磨石として利用されたと考えられる。

凹石は301~400gのものが6点、401~500gのものが4点、501~600gが5点、601~700gが4点、4.1~5.0



第39図 県内の主な配石遺構位置図

No.	遺跡名	所在	時期	No.	遺跡名	所在	時期
1	土出原遺跡	片品村土出	中・後期	30	保渡田Ⅱ遺跡	群馬町中里	中期
2	和名山遺跡	月夜野町小川	中・後期?	31	生原遺跡群	箕郷町生原	中期
3	柴の木平遺跡	月夜野町月夜野	中期末	32	白川拿松遺跡	箕郷町白川	中・後期
4	深沢遺跡	月夜野町月夜野	後・晚期	33	野村遺跡	安中市東上秋間	中期後半
5	矢塚遺跡	月夜野町月夜野	後・晚期	34	仁田・暮井遺跡	松井田町入山	中期後半
6	布施遺跡	新治村布施	後原中紀	35	坂本北古遺跡	松井田町坂本	中・後期
7	十二原Ⅱ遺跡	月夜野町上津	中期	36	五科野ヶ久保遺跡	松井田町五科	後期
8	上津地区遺跡群	月夜野町上津	中期	37	五科小竹谷跡	松井田町五科	中期
9	新治村役場遺跡	新治村布施	晚期前葉	38	行田梅木平遺跡	松井田町行田	後期
10	上光寺遺跡	沼田市下条町	後期	39	行沢大竹遺跡	妙義町行沢	後・晚期
11	寺人遺跡	沼田市石墨町	中期	40	天神原遺跡	安中市中野谷	後・晚期
12	糸井太夫遺跡	昭和村糸井	後期	41	下宿家遺跡	安中市中野谷	後期
13	東平遺跡	雄志町今井	後期	42	南蛇井増光寺遺跡	富岡市南蛇井	中・後期
14	長野原一本松遺跡	長野原町長野原	中・後期	43	田株中原遺跡	富岡市田株	中期末
15	横壁中村遺跡	長野原町横壁	中期	44	長根安達遺跡	吉井町長根	中期末
16	清水遺跡	中之条町山田	後・晚期	45	藤岡平地区遺跡群	富岡市東平井	中・後期
17	久森理伏列石遺跡	中之条町二只瀬	中期末	46	中大深遺跡	富岡市中大深	中期末
18	中山遺跡	高山村中山	中・後期	47	上原須寺跡遺跡	藤岡市上原須	中・後期
19	押手遺跡	子持村北牧	後・晚期	48	高篠裏ノ遺跡	藤岡市上栗須	後期
20	鬼澤石器時代遺跡	赤城村鬼澤	後・晚期	49	谷地遺跡	藤岡市中栗須	後期
21	三原田遺跡	赤城村三原田	前・後期	50	八坂遺跡	伊勢崎市波志江町	後・晚期
22	小室遺跡	北橘村小室	中期後半	51	荒砥二之塙遺跡	前橋市飯土井町	前～後期
23	前中後Ⅱ遺跡	北橘村八崎	後期	52	横儀跡跡群大郡遺跡	前橋市下大郡町	後期
24	空沢遺跡	渋川市行幸田	中・後期	53	曲尻遺跡	赤堀町・東村	中・後期
25	長井(櫻田)遺跡	会津村櫻田	中期末	54	宍道・周邊跡	鶴川村東沢	後・晚期
26	茅野遺跡	猪東村長岡	後・晚期	55	上鶴ヶ谷遺跡	新星村鶴ヶ谷	後期前葉
27	下新井遺跡	猪東村新井	後・晚期	56	千柄谷戸遺跡	桐生市川内町	後・晚期
28	長久保大畑遺跡	吉岡町大久保	中期	57	北米岡遺跡	埼玉県米国	後期前葉
29	中等地・宮地遺跡	其他町番地	中期末	58	闇塚遺跡	鶴林市赤生山町	前・中期

第2表 県内の主な配石遺構一覧表

kgが5点、5.1～10.0kgが4点、最大規模の多孔石は75.1kgであった。

敲石は300～400g 3点、磨石は300～400g が使用頻度の高いところと思われる。石皿は欠損しているので重量区分はできないが2kg以上でないと使いものにならなかつたと想像される。

丸石の重さは100gが2点、最大は33.6kgを計測した。丸石は河原石の丸いものをそのまま使用しているものと、磨り減らしているものがある。以上の状況から遺跡全体では①～⑩の様な特徴があげられる。

①丸石を多用すること。②山腹炉の中に丸石が入っている。③環状配石遺構の1でヒトガタの配石の頭部と思われる所にも使用されている。④円石の多いこと。⑤剝石山の自然剝離の石を殆ど加工もせずに石斧・石皿に使用している。⑥東北地方産の白色凝灰岩1片が出土している。⑦石棒は40cmから18.5kgと大きさは様々であり完全な形のものは少ないが、その内101～150gに5点、1.1～5.0kgが5点と重きの上で集中が見られる。⑧着色した石帯が検出されている。⑨着色した自然石が15点5.17～180gを検出している。⑩本遺跡は祭祀を中心とする遺構と考えられるのに土偶は1点も検出されなかった。

石器と上器の出土状況は「祈りの場」環状配石遺構内に持ち込まれたときか、その「祈り」の終わった時点すでに完形品でなかった可能性が考えられる。

VII. ま と め

群馬県内では縄文時代中期・後期・晩期に該当する列石・壇石・組石と呼ばれる遺跡が58個所発見されている(第39図・第2表)。

松井田町は碓氷川による谷筋にあり、見事な自然に包まれた景勝の地であり、縄文人達はこの地に住み、木の芽や木の実を採取し、鹿・猪等の動物と川の魚を捕って生活の糧にしていた事が想像される。こうした人々の生活の跡がまた一つ今回の発掘調査によって加えられた。群馬県内はもとより全国的に見ても本遺跡のような完全な円環を呈する環状列石は数少ない事例と思われる。

一般的に縄文人の生活の場の中心は竪穴住居、獣を捕らえるための陷阱穴、食料を貯蔵するための貯蔵穴、墓域や祭祀の場所として考えられる配石遺構は縄文人の心の闇り所、そしてシンボルであったと考えられている。しかし配石遺構は日本各地で多数発見されていながら、まだまだ「ナゾ」の多い遺構である。

松井田町坂本七北遺跡では竪穴住居跡1軒、柄輪形敷石住居跡1軒、配石遺構4基、集石3基、石垣2基、土坑5基を検出した。これらの遺構は石の移動だけを考えても多くの人手が必要となり、近くにいくつかの大きな集落の存在が想像される。本遺跡はこれらの遺構を作った人達の生活の一端と祈りの場が現れた遺跡であると言える。4基の環状配石遺構は環状配石遺構1(以下環1とする)を中心にして半径50mの中に環2・3・4が設置され、このほか調査以外でも試掘調査の結果で何カ所か大きな自然石による石組が確認されている。この様な状況は秋田県の大瀬環状列石の外帶と同じ役割をしているものと思われる。

環1は立石・列石・組石の集合体がサークル状に構築され、これらの配石の区切りがおよそ30cmになり、12分割を意識したものと思われる。環1は立石を伴う組石①②③と④⑤⑥⑦の形を組合せは太陽の運行に併せて配石したものと思われるが、どの組み合わせが春分・夏至・秋分・冬至に該当するのか調査中には観測する機会がなかったが、何れ環1は復元が予定されているので後日観測可能と考えている(注1)。配石の155～180は「ヒトガタ」を思わせる組石で、頭と胸に当たる配石177と179の下から埋甕が検出された。この埋甕は眞身葬であれば人体が入る程の大きさと考えられる。まず性器を設置しその上に環状の配石を構築したものと思われる。この埋甕を壇墓と考へると、埋葬された人物は鬼面を代表する人物であったと考えられる。この埋甕以外環1からは土坑等の遺構は検出されなかった。この埋甕は1ヶ所だけであり器形と施文方法等から加曾利EIV式新に当たる上器であり環1の配石102・103の間に出土した小型甕が壇之内II式上器と考えられるので環1はおよそ500年間この地域のシンボルとして、「もの送り」・「祈りの場」として存在したことが想像される。環2はEIII新及び曾利系の上器と称名寺・壇之内式土器が出土地している。環3からは加曾利EIII新から称名寺・壇之内式土器が出土している。環4からはEIII新もあるが称名寺・壇之内式土器が多く出土している。

以上の様子から環1はEIII式環構築され壇之内式土器の頃まで使用されていたと見られる。環2・3・4は環1を取り囲むように随時構築されていったものと考えられる。本遺跡から出土した多数の土器の内5点(遺物No.56・112・171・176・191)以外は器形の復元も不可能な状況である。もともと環状配石遺構には

完全な形のものは残さなかつたものと考えられる。(注2)

(環1) の埋甕No56は高さ55.5cm口径54.2cm、J 11グリッドの埋甕No191は高さ52.6cm口径39.3cm、No160推定器高52~3cm推定口径40cmの計測値からこの地域の土器の最大級のものと考えられる。又No56は施文はされているが焼きがあまく、No191は粗製で隆蒂1本だけでありNo160も櫛模き文が粗く、いわゆる粗製土器であり埋葬用の埋甕の可能性を考えられる。

竪穴住居跡は環状配石の構築される以前、勝坂式土器を作り敷石住居では堀之内II式の土器が出土しているので環状配石4との同時期性が考えられる。

集石1は黒曜石と自然石の破片が多く出土し、その石の下から灰層が検出されている。石器の加工場及び石を焼いた場所と考えられる。集石2は石の下に土坑・焦土及び灰層も検出されず石は小さく火受けしているので、祭祀の時の供物を蒸し焼き(煮炊き)に使用した石の施業場所と考えられる。

石通炉は2ヶ所とも焼土や炭化物は見られず、2号石通炉内には大きな丸石No294が入っており、とても火を焚くことは出来ないと思われる所以祭祀用の特別な用途の炉と考えられる。

土坑の石組みは表面的な無いで下部には石組みが全く見つかなかった。(注3)

K・L-9~11グリッド付近に埋甕No191と昭和の土地改良時の攤乳坑に偏平な石が見られたのでこの周辺にも配石遺構の可能性が考えられるが攤乳のため遺構として捉えることが出来なかつた。

以上板本北東遺跡で特徴付けられる事について記してみたが、この報告書が今後の配石遺構研究の一助になれば幸いです。

(注1) 小林達雄著「幾文人の世界」で幾文人は年商行動スケジュールを自然の移り変わりに合わせて計画的に進行させていた。決められた季節に狩猟し、漁獲(リクマス)、植物の採集(第1回地雷原・長野林中地名ドングリ)をし上場を行っている。

(注2) 大森瑞秋列石の「もの送りの場」でもこの様な状況が報告されている。

(注3) 月夜野町の深沢遺跡や前橋市の大道東遺跡のような古組みは見られない。

参考文献

「幾文土器大観 1~4」 小林達雄編集
1988~1989年

「大森瑞秋列石―内農の思想」 よねしら考古学研究会
1986年

「九年遺跡 第3次・第11次調査報告書」 北上市教育委員会

「新所の考古学」 (別) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
1988年

「考古学ライブリー-4 配石遺構」 塚原正典著
1987年

「考古学ライブリー-10 祭祀道路」 小野真一著
1982年

「考古学ライブリー-11 祭祀跡地名鑑定」 K
1982年

「松井田町誌」 松井田町誌編纂委員会 1985年
「御代田町誌 歴史編上」 御代田町誌刊行会
1996年

「足戸前原遺跡 硬石城址」 群馬県教育委員会
(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985年

「幾文―いのりとうたげー」 北橘村教育委員会
北橘村歴史民俗資料館 1998年

「幾文人の世界」 小林達雄著 1997年

「四谷山 石器の基礎知識III 講文」 鈴木道之助著 1981年

「群馬考古学」 第17・44・48・50・55・59・別冊5・6 鐘山閣

「深沢遺跡・前田遺跡」 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987年

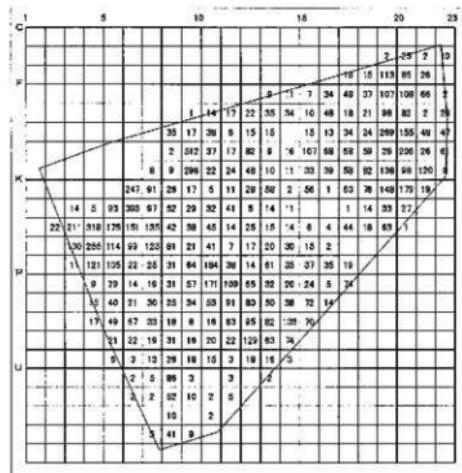
「武跡は今」 -山上文化財巡回展示会幹事会 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997年

「天神原遺跡」 安中市教育委員会 1992年

「前若原遺跡 財團編」 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988年

「若波古墳」 日本国考古学4 篠原と奈良 1985年

「考古学のための化学10要」 馬淵久夫 富永謙共著 1993年



第3表 遺物集計表



調査地全景



調査前現況



竪穴住居跡 全景

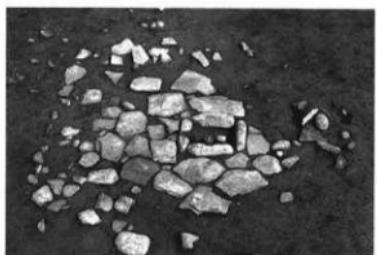


竪穴住居跡 遺物出土状況



同左

図版 2



柄鏡形敷石住居跡 全景



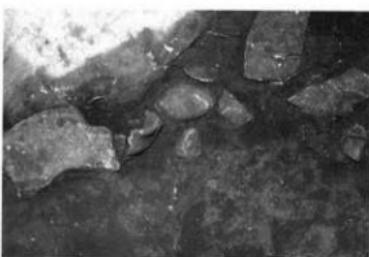
同左 炉



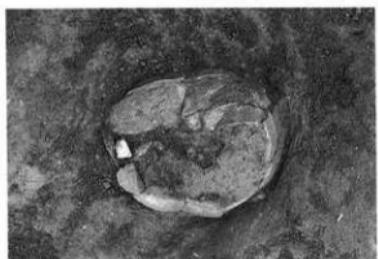
空から見た環状配石遺構 1



環状配石遺構 1 (南から)



同左 小形壺出土状況



配石下の埋甕



同左



環状配石遺構 2



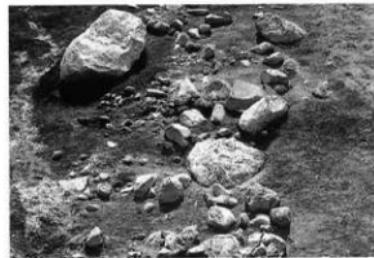
同左 石棒出土状況



環状配石遺構 3



環状配石遺構 4



1号集石（北上から）



同左 遺物出土状況

図版 4



2号集石



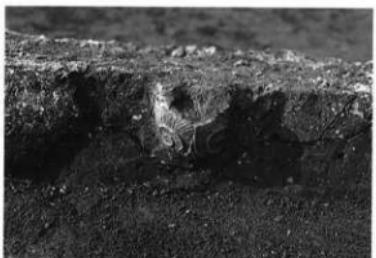
3号集石



1号石圓炉



2号石圓炉



埋甕 (K-4グリッド)



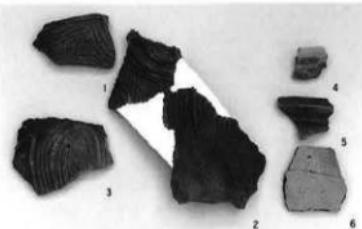
埋甕 (J-11グリッド)



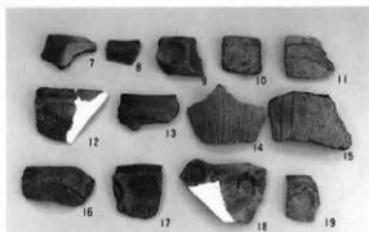
遺物出土状況 (O-13グリッド)



遺物出土状況 (J-7グリッド)



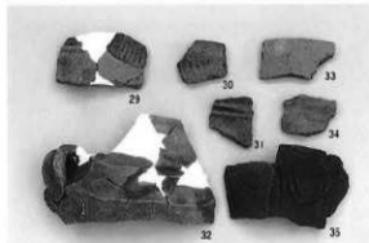
竪穴住居跡（1～6）



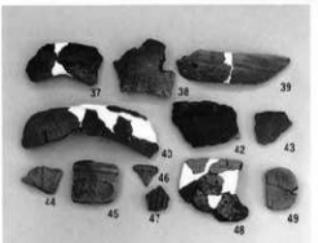
柄鏡形敷石住居跡（7～19）



柄鏡形敷石住居跡（20～28）



柄鏡形敷居住居跡（29～35）



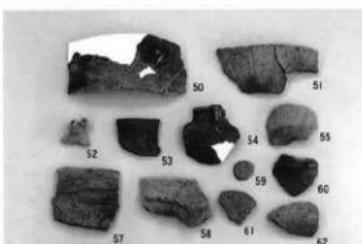
柄鏡形敷石住居跡（37～49）



柄鏡形敷石住居跡（36）



柄鏡形敷石住居跡（41）

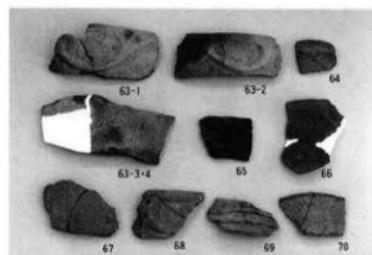


環状配石造構 1（50～62）

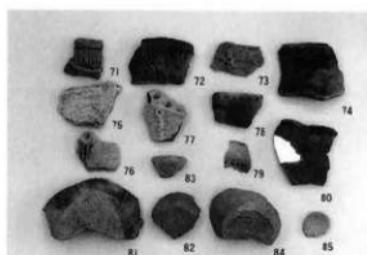


環状配石造構 1（56）

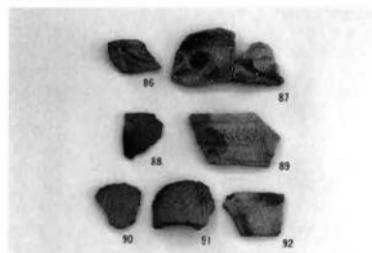
图版 6



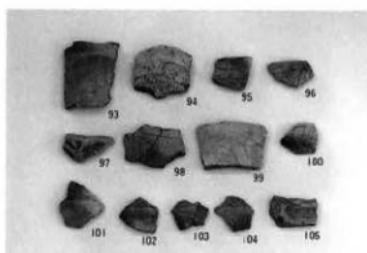
环状配石遗構 1 (63~70)



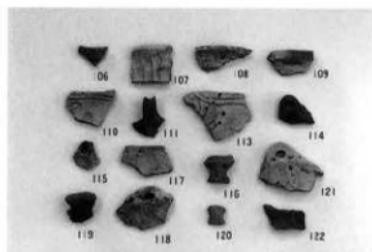
环状配石遗構 2 (71~85)



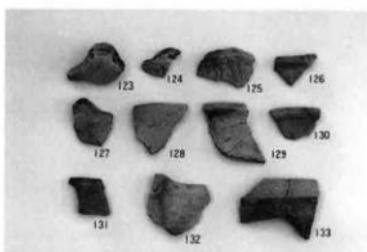
环状配石遗構 3 (86~92)



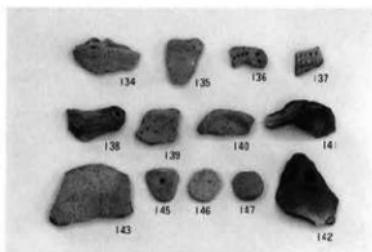
环状配石遗構 4 (93~105)



环状配石遗構 4 (106~122)



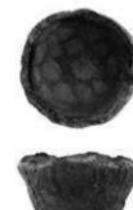
环状配石遗構 4 (123~133)



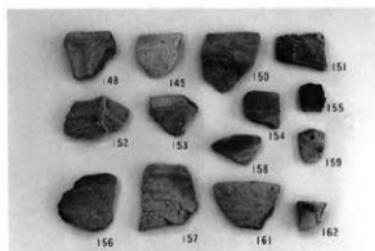
环状配石遗構 4 (134~147)



环状配石遗構 4 (112)



环状配石遗構 4 (144)



1号集石 (148~162)



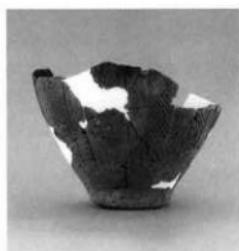
1号集石 (160)



2号集石 (171)



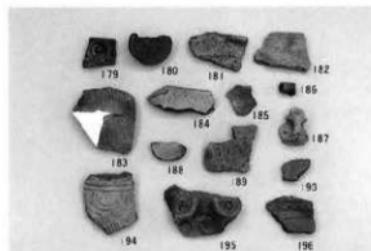
土坑 (176)



土坑 (177)



1号集石 (163~170)
土坑 (173~175)



縄文土器 (179~196)



縄文土器 (191)

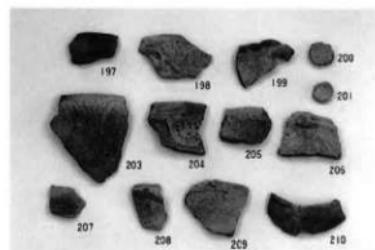


縄文土器 (192)



縄文土器 (193)

図版 8



縄文土器 (197~210)



縄文土器 (211~222)



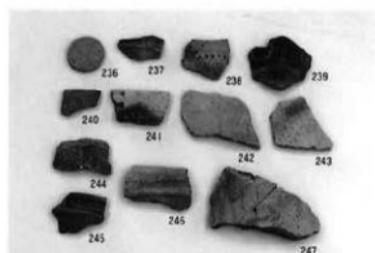
縄文土器 (202)



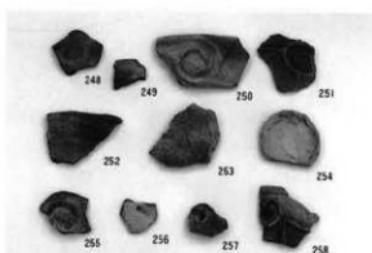
縄文土器 (215)



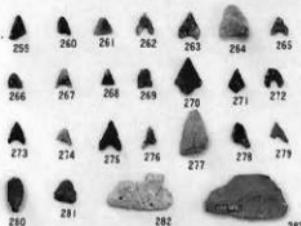
縄文土器 (223~235)



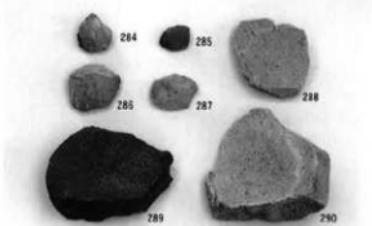
縄文土器 (236~247)



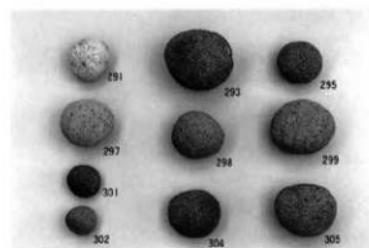
縄文土器 (248~258)



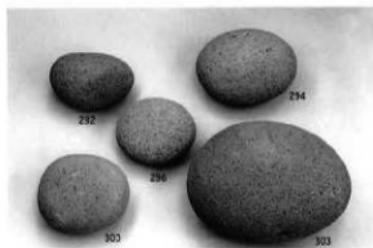
石器等 (255~283)



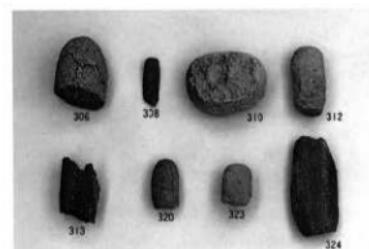
スクレイバー・石皿 (284~290)



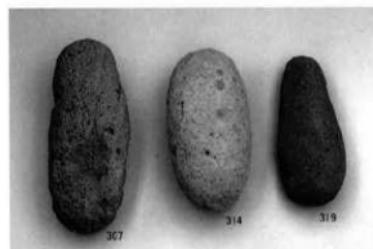
丸石 (291、293、295、297~299、301、302、304、305)



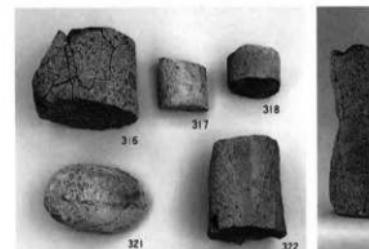
丸石 (292、294、296、300、303)



石棒 (306、308、310、312、313、320、323、324)



石棒 (307、314、319)



石棒 (316~318、321、322)



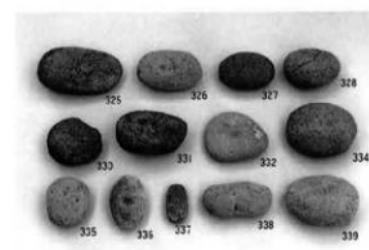
石棒 (309)



石棒 (311)



石棒 (315)

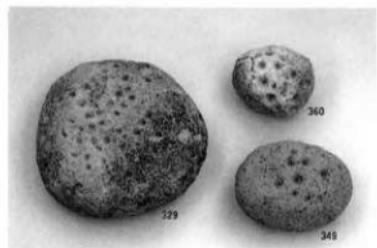


凹石等 (325~339)

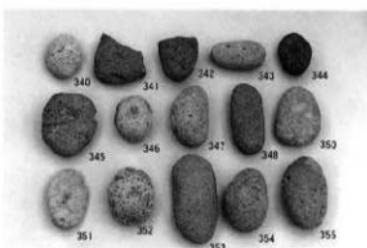


多孔石 (333)

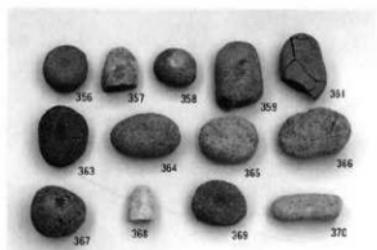
図版10



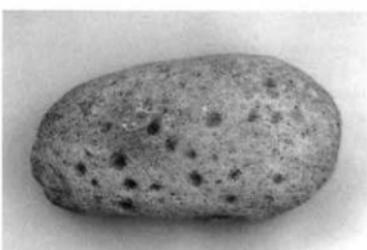
多孔石 (329、349、360)



凹石等 (340~355)



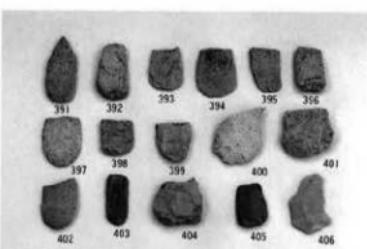
凹石等 (356~370)



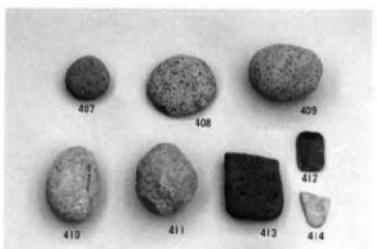
多孔石 (362)



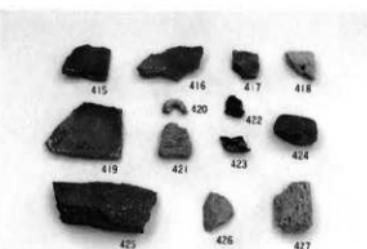
磨製石斧・打製石斧 (371~390)



打製石斧 (391~406)



磨石等 (407~414)



着色土器等 (415~427)

抄 錄

フリガナ	サカモト キタウラ イセキ					
書名	坂本北裏遺跡					
副書名	碓氷峠くつろぎの郷公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次						
シリーズ名	松井田町埋蔵文化財調査会報告書					
シリーズ番号	<10>					
編著者名	スナガ環境測設株式会社 金子正人					
発行	松井田町埋蔵文化財調査会（松井田町教育委員会事務局内）					
発行機関所在地	〒379-0292 群馬県碓氷郡松井田町大字新堀245番地 027-393-1111					
発行年月日	西暦1999年3月20日					
フリガナ遺跡名	サカモト キタウラ イセキ					
所収遺跡名	坂本北裏遺跡					
フリガナ所在地	群馬ケン ウスイグン マツイダマチ オオアザ サカモト アザ キタウラ					
所取遺跡所在地	群馬県碓氷郡松井田町大字坂本字北裏1255番地外					
市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査開始	調査終了	調査面積
104019		36°21'00"	138°43'20"	1997.11.10	1998.02.13	4,100m ²
公園建設						

種別	主な時代	遺構数	主な遺物	特記事項		
堅穴住居跡	縄文時代中期	1	土器及び石器	勝板 焼町		
柄鏡形敷石住居跡	縄文時代後期	1	土器及び石器			
環状配石	縄文時代中～後期	4	土器及び石器	環状祭祀遺構 埋甕		
集石	不明	3	土器及び石器			
石匂炉	縄文時代中～後期	2	丸石			
土坑	縄文時代中～後期	5	土器及び石器	埋甕		

調査に参加した方々は下記の通りである。(順不同・敬称略)

石川サワ子 内田恵美子 桑島英彰	都丸藤子 中川住一	山崎勘治	石田みよ子
狩野宮子 斎藤ミヨ子 高橋あき	根井よし子 今井つる	小林ひろ	木島勇吉
石田松美 三上良夫 大野加代子	武井 健 佐藤小智子	佐藤ハルエ	佐藤まつゑ
佐藤あさ子 荒木ゑみ 広瀬梅子	阿久沢豊吉 堀口千里	柳沢敏江	池田英幸
武田金作 武田てる子 佐藤幸雄	柳沢尚司 萩原淳一	萩原登巳司	

坂本北裏遺跡

1999年3月10日 印刷

1999年3月20日 発行

発行 松井田町埋蔵文化財調査会

編集 スナガ環境測設株式会社

前橋市青柳町211番地の1

印刷 朝日印刷工業株式会社